
静かな夜

森いちほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かな夜

【Nコード】

N6203H

【作者名】

森いちほ

【あらすじ】

高校生の男女、一組の夫婦、夜に働く人々など、ある春の一夜の様々な人間模様をオムニバス形式で描きます。書き方にも少し工夫を凝らしてみました。

第一話 真夜中の宇宙旅行

その日は風が強かった。

コンビニの自動ドアを出て、入り口のすぐ脇に止めておいた自転車が倒れているのに気付く、俺は心の中で軽く舌打ちをする。五年前前に買った二十六インチの銀色のクロスバイクで、長い間車庫に放置してあったのを、引っ張り出してきて最近よく乗り回している。2週間前に高校の卒業式を終えて、嫌というほど暇な時間ができたからだ。

舌打ちをしたのは別に自転車が大事だったからではない。ここ数日わけもなくイライラしていた。希望していた大学にも危なげなく合格し、卒業証書も無事受け取り、責任やストレスから解放されて今が一番能天気楽しめる時期のはずなのに。

今日だって高校の悪友たちと都内でハメをはずして一日遊びたおしてきた。最終に近い電車に乗って地元の駅に着き、帰宅途中にコンビニに立ち寄ったところだ。

かといって、別に買い物があったわけじゃない。何となく家に帰りたくなかった。いや、家に問題があるんじゃない。ただどこかへ行きたかっただけだ。どこかへ行つて、何かをしたかった。

ここしばらく、そんな漠然とした欲求が体の中を満たしていた。俺の中のどこからくる欲求なのかは分からない。具体的にどこへ、何をしに行きたいのかも判然としない。自分自身のことなのに、その曖昧さが余計苛立ちを募らせる原因なんだろう。友達とバカ騒ぎでもすれば少しは納まるかと思っただ、俺の鬱屈はこの時間になってもまだ晴れていなかった。

横倒しの自転車に歩み寄り、いささか乱暴に車体を起こす。かがんだ時に右肩にかけていたナップザックがずり落ちて、俺はさらにイラついた。

春の嵐なのか、今朝から吹き続いた強風は、日付の変わる今にな

つてようやく静まる気配を見せていた。それでも時折思い出したかのような突風が、こうして自転車を倒し、道端のゴミを夜空に舞い上げる。

片手で自転車を引きながら、俺はフリースパーカーのポケットから真新しいガムを取り出して、封を切ると二・三粒口に放り込んだ。彼女に気付いたのは、その時だ。

コンビニは幹線道路と交差する十字路に面していた。南西は道路に接し、北東は民家に接している。駐車場は石塀によって民家と隔てられていたが、その石塀に沿うようにバカデカイコンビニの看板が立っている。看板はこのエコなご時勢にも関わらず、夜には煌々とライトに照らされて存在を主張していた。

その看板の下に、女の子が一人しゃがみこんでいた。女の子といっても、俺と同じ年くらいのこと……高校生だ。濃紺のブレザーに空色のストライプタイ、グレーを基調としたチェックのスカート、紺色のスクールソックスにローファー。どこの制服かは知らない。少なくとも俺が卒業した高校のものとは違っていた。俺の高校は卒業式が少し早かったが、在校生はまだ春休みに入っていないし、他校も似たようなもんだろう。

彼女は確か俺がコンビニに入る前からそこに座っていた。都内ならば珍しくない光景だ。深夜だつて制服姿の高校生たちが我が物顔に闊歩している。でも、ここは郊外の住宅街にほど近いコンビニの駐車場で、しかも時間的に人通りはほとんどない。そんなところに一人ポツンとうずくまる女子高生は異様といえば異様だ。

とはいえ、普段だつたら関わりあうのも面倒くさく、横目で見て通り過ぎるだけで、俺はさっさとその場を立ち去って次の日には忘れていただろう。そんな俺が思わず足を止めたのは、彼女が俺のことをジッと見つめていたからだ。彼女は、睨むでもなく、驚きを宿すでもなく、興味本位というわけでもなく、瞬きもせずただひたすら俺のことを注視していた。

もしかして知り合いかと記憶を探る数歩の間、俺は意図せず彼女

と見詰め合った。しかし、どうしても初対面の気がして、仕方なく足を止める。

「食う？」

立ち止まったものの、口にする言葉が見つからず、俺は今開けたばかりのプラスチックケース入りのガムを彼女に向かって差し出した。我ながら、なんと間抜けな言葉だろう、と思いつながら。

「何ガンつけてんだよ」と言えるほど俺は好戦的ではないし、虚ろでなく意思を持った彼女の視線が、どちらかといえば捨てられた子犬のようで「何か用？」という一言を言うのが憚られた。

ところが、彼女から返ってきたのは思いがけない言葉だった。

「知らない。盗んだガムなんて」

「見てたの？」

「見えたの」

「チクる？」

「別に」

興味なさそうに、彼女はそこで初めて視線をそらせた。

「こんなとこで何やってんの？」

「彼氏待つてんの」

「こんな遅くに？ もう12時になるじゃん」

「関係ないでしょ」

その通りだ。俺がコンビニからガムを万引きしたことが彼女に関係ないように、彼女が彼氏に何時間待ちぼうけを食わされているかなんて、俺にはこれっぽっちも関係ない。

だけど、俺はその場から動かなかった。

「ずっと待つてんの？」

「悪い？」

「悪くはないけどさ。来ないんなら電話でもしたら？」

「したよ。何回も」

「相手、何だつて？」

「っていうか、電話に出ない。メールも返ってこないし」

「それって……」

つまり、フラれたってことじゃ？

心の中でそう思ったものの、さすがに口には出さなかった。それでも、彼女には雰囲気伝わってしまったらしい。

「別れようとは言われたんだよね。ちょっと前にさ。他に好きな人ができたからって」

「でも、納得しなかったんだ」

「当たり前じゃん。そんな、一方的に言われたってさ。こっちはまだ好きなんだし……。付き合ってる相手から『他に好きな人ができたから別れてくれ』って言われて、ハイそーですかって素直に別れるバカがいる？」

「まあね……」

同意を求められたものの、俺にはよく分からなくていい加減な相槌を打った。高校に入ってから一人だけ付き合った女の子はいたけれど、たかだか半年ほどの間だったし、特別な心の交流もなく自然消滅してしまったから、惚れただのフツただの、俺にはよく分からない。

「だけど、相手の気持ちはもう別の方向向いてんだろ？」

「そうだね」

「……じゃあさあ」

仕方ないことなんじゃない？

偉そうなことはいえなかったが、俺は単純にそう思った。もちろん、頭の中で分かっているにしても、単純に割り切れないのが恋愛だということくらいは俺も知ってるけれど。

「だから、ここで待ってんじゃん」

「ハ？ どういうこと？」

「先輩に言っただ。今日一日ずっとここで待ってるって。来てくれたらまだ少しはあたしのことと思ってくれてるってことだし、来てくれなかったら……」

完全に望みはないってことだ。それくらい俺にも分かる。

俺はジーンズのポケットから携帯を出して時刻を確かめた。もう夜中の12時を何分か過ぎてている。”今日”は終わって”明日”になった。

ハッキリ告げるべきかとしばらく考えて、恐る恐る顔を上げるとつづくに分かつていたのか、彼女は困ったような、寂しげな——というより悲しげな笑顔を浮かべて目を伏せた。

「フラれちゃった」

そして、わざと明るくつぶやく。多少演技がかってはいたが、俺は笑う気にはなれなかった。

「どんな人だったの？」

「んー。部活の先輩。一年で入部した時からすごく面倒見てもらって。だからあたしの勘違いだったんだろうなあ——。先輩も、何ていうか、お情けで付き合ってくれてたんだよね。優しいし、オトナな人だったから——」

「部活って何部？」

「美術部」

文化系か。

「まあさ、男なんてその先輩一人じゃないんだし、これからいくらでもいい奴いるんじゃない？」

またしても、俺はチープなセリフを吐いてしまった。それより、何で俺は初対面の、名前も知らないようなコの恋愛相談に乗ってやってるんだろう。いくら家に帰る気がしないからって。俺はそれほど親切でも人懐こいわけでもなかったような気がするが。

彼女のすぐるような視線が無視できなかったからか。誰かに構ってほしいのだと切実に訴えていたからか。

安っぽいセリフでも言わないよりはマシだったのかもしれない。

彼女は初めてニッコリ笑うと、「そうだね！」と力強く言った。

早くも少し立ち直ったのか？

違うな。多分彼女は立ち直りたかったんだ。彼氏がもう約束を果たさないだろうことは分かっている、それでも同じ場所に留まって

動き出せないでいる自分の背中を誰かに押してもらいたかったんだ。そこに、たまたま俺が通りかかった。だから、あんなに熱心に見つめられてたんだろう。

断じて俺が見とれてしまうほどかつこよかったからではない。

俺と話すことで少しは気が晴れたのか、彼女は地べたに置かれていたスクールバックを手に取ると、その場に勢いよく立ち上がった。ギリ一七〇の俺と比べると十センチほど目線が下だ。

時間が時間だったし、自宅が近いなら送っていくのに吝かではないと俺は彼女に提案しようとした。だが、彼女は予想に反してとんでもないことを口にする。

「ねえ、どつか連れてってよ」

「ハアア？」

遊んでいるコには見えないのに、見かけに反して軽い性格だったのか。まあ、最近は見かけで判断できない人間が多いのは確かだけど。

「だって、何かこのまま家に帰りたくないし」

あ、それは何か分かる。俺もちょうど同じことを思っていたところだ。

「どっかって、どこだよ？」

「どこでもいいけど……なんか、気分が晴れそうなところ」

「渋谷とか？ 今からじゃ電車ないじゃん」

「自転車があるじゃん」

「自転車で渋谷まで行けって！？」

「うーん、そういうところじゃなくて……海、とか」

それを聞いたとたん、思わず失笑してしまった。あまりにバカらしくて。

「何だ、それ。こういうシチュエーションのベタな展開？ それって普通、車持つてる奴に対して言うことだろ」

当然、笑われた方はいたく気分を害したらしく、ムツとした口調と鋭い視線が返ってきた。

「じゃあ、分かったよ。山行こうよ。山の方がここから近いしさ。それか、樹海でもいいや。樹海」

ここで逆ギレされる理由も義理もなかったが、彼女の態度に気圧されて、俺は思わず心にもないことを口走っていた。

「いや……樹海に行くくらいだったら、やっぱり海かな、と」

聞きとがめて、してやったりとばかりに彼女はニンマリ笑う。

「言ったね。もう取り消せないからね」

一体何なんだ。この女。

でもまあ、人間、泣いたカラスがもう笑ったつてくらいがちょうどいいのかもしれない。放っておいたら本当に樹海に行きかねない雰囲気が彼女にはあった。要するに、それだけヤケになってるってことだろう。

俺も家に帰りたくなかったのは事実だし、かといってこのまま一人でどこかへ行く勇氣もなければ、目的地を自分で設定できたわけでもない。漫喫やファーストフードに居座るのも何か違う。

彼女に会わなければ仕方なく帰宅していただろう。原因不明の割り切れないもやもやした気持ちと、大量の苛立ちを抱えて。

それを考えたら、彼女の誘いに乗るのも悪くないのかもしれない。不意に、俺はそう思った。

ここから、一番近い海まで何十キロあるのか知らないが、一晩中自転車で飛ばしたら、少しはもやもやも晴れるかもしれない。

彼女もいることだし。

そう、それが肝心だった。最後のキーポイントと言ってもいいかもしれない。誰か一緒に付き合ってくれる人間がいたら、多少の無茶をやってみたかったのは確かだ。

数秒間でそれだけ考えて、俺は一度だけうなずいた。

「よし、分かった。行つてやろうじゃん。海に」

「ホント？」

言いだしつぺのくせに、それを聞いて彼女は目を丸くする。

「冗談だったの？」

「半分本気。まさか了解するとは思わなかったし」

「んじゃ、やつぱやめとくか」

「まさか！ 取り消せないって言ったでしょ。男に二言はない！」

「……いや、それどっちかってーと俺のセリフだし」

小声で突っ込んで苦笑すると、彼女は変な顔で舌を出した。

「よし、じゃあ出発！」

勝手に仕切って彼女は自転車の荷台の方へ歩み寄る。だけど、俺は一旦彼女を引き止めた。

「ちよつと待った。その前に名前聞かせてよ」

「え？ あ、そつか。んゝ、じゃあ”よん”って呼んでもらえる？」

「何それ？ あだな？」

「うん、そんなもんな。で？ そっちは？」

「じゃあ、俺は”ザキ”で」

「それもあだな？」

「まあね」

奇妙な自己紹介は簡単に終わった。

「ねえ」

「え？」

「後ろ乗るのはいいんだけどさ、寒い」

風はまだ強めに吹いていたし、春先とはいえ夜中のこの時間は気温も大分下がる。自転車に乗ったら漕いでいる俺はいいとしても、確かによんの今の格好では少し冷えるかもしれない。

考えるまでもなく、俺は首に巻いていた臙脂のマフラーをはずすとよんに渡した。

「ありがと」

礼を口にした割りには、「当然」という顔つきでよんはそれを受け取る。俺は風除けに上着のファスナーをきっちり閉めた。白いフリースパーカーの下は長袖Ｔシャツ一枚だ。

ちなみに、上着とマフラーの色のセンスがあまりよくないのは重々自覚している。人には言えないが、仮面ライダーっぽい臙脂のマ

フラァーは俺の一番のお気に入りだ。

俺はナツプザックを胸の方に背負うと自転車のトップフレームをまたぐ。そのまま足を地面につけて支えていると、スクールバックを肩にかけ、よんは荷台に横座りして俺の腰にためらいもなく両腕を回した。今までに女の子とここまでの至近距離で密着したことのない俺は、それだけで心拍数が跳ね上がる。ブレザーを着ていてもよんの柔らかい体の感触が伝わってきて、頬が紅潮し、頭に血が上るのが自分でも分かった。フローラルな香りがいまだやまない夜風に乗ってきて鼻腔をくすぐる。

「俺が疲れたらよんも自転車漕げよな」

「気が向いたらね」

赤い顔を悟られたくなくて、少しぶっきらぼうにそう言うと、至極マイペースな反応が返ってきた。

俺の自転車はクロスバイクだが最初から荷台付きだ。ホリゾンタムフレームだからスカート履きの女子が漕ぐには少しキツイかもしれない。変速機は二十三段階で、普通に漕いでいてもかなりのスピードは出るんだが。

なるようになるだろうし、行けるところまで行ってやろうとひとまず腹をくくって、俺は地面を蹴ると力をこめてペダルをこぎ始めた。

「ねえ！」

走り始めてすぐに、よんが話しかけてくる。

「何？」

「やっぱさっきのガムもらっていい？」

「いいよ。上着の左ポケットに入ってるから、勝手にとって」

言葉に従ってよんが俺の腰に回していた手を離すと、重心が変わって少しよろけた。

「ミントだけどいい？」

「うん、大丈夫。好きだから」

よんの手がポケットの中に入ってくるのが分かった。直接体に触

れられているわけでもないのに、何だかムズムズする。

「これで共犯だね」

ガムの入れ物をポケットに戻すと、よんが楽しそうに言った。万引きのことを指しているのだとすぐに分かり、思わずニヤリとする。よんがどういっつもりでそう口にしたのかは知らないが、何だか嬉しくてウキウキした。

「よんってさあ！」

「何！？」

「”ペ”のファンなの？」

「？ 何、”ペ”って？」

「”ペ”って言ったらあの人しかないじゃん。韓国の、有名な…

…」

「違うよ」

途中で言いたいことが伝わったらしく、よんは俺の言葉を遮るように強い口調で答えた。ひどく不機嫌そうに。

「じゃあ、何でよんなの！？ 顔が似てるから？」

「殴るよ！」

続けて俺がからかうと、本気で怒ったような声が返ってきた。俺は逆に楽しくなって、思わずほくそ笑む。よんには見えていないはずだ。

「あたしさあ！」

「何！？」

「”ペ”に似てる？」

だが、次の瞬間よんは一転して不安げな声音になった。実は、自分でも気にしていたんだろうか。

「うそうそ、似てないって！」

安心させるために、俺はそれまで以上の大声を出した。自転車を漕ぎながら前と後ろでしゃべっているから、正直ちよつと苦しい。

よんが”ペ”と似ているところといえば、眼鏡をかけているところくらいだ。しかも、よんの眼鏡はお年寄りが好みそうな、太い黒

縁の大きな眼鏡だ。およそ若い女性が自分から選ぶとは思えない。茶色がかった長めの髪を二つに分けて結んでいる女子高生も、俺の周りではあまり見かけない。一昔前の女子高生のイメージってこんな感じじゃないだろうか。もしくは、あまり詳しくないが、二次元の世界なら似たような女の子がいた気がする。コンビニの駐車場はそれほど明るくなかったし、近くでマジマジと見つめたわけではないが、眼鏡と髪型さえどうにかすればよんはかなり可愛い部類に入と思う。色は白いし、ぶくつとした唇は、シャイニーリップとかのCMに出てきてもおかしくない。両親が厳格で、今時な服装をさせてもらえないんだろうか。

「ザキだつて人のこと言えないくせにさあ……」

しばらく黙っていたと思ったら、よんが心底不満げにそうつぶやくのが聞こえてきた。

「え？　俺が何？」

「ザキなんてオタクっぽいじゃん！」

「俺？　どこが？」

「髪型とかさあ。中途半端に短いし！　前髪なんてオン・ザ・眉毛じゃん！」

言い放つと、「今時オン・ザ・眉毛って」と繰り返して一人で笑っている。背中越しによんが肩を震わせているのが伝わってきた。

「俺オタクじゃねえーしっ！」

「自然科学部とかに入ってた！？」

「一応サッカー部だったんすけど！」

「一度もレギュラーにはなれなかったけどな。」

「うそっ！　全然そんな風に見えない！」

「一体どんな偏見持ってたんだよ。」

そりゃ俺も自分がイケメンじゃないのは自覚してるよ。「いつも半分寝てるみたいな目をしてる」とか言われたことあるし。この歳まで特別モテた記憶もないし。高校三年間、クラスの女子ともとりたてて仲良くできたわけでもないしっ！

「あゝっ！」

つらつらと考えていると、突然よんが大声を上げた。

「どうした？」

「止めて、止めてっ！」

何だか焦った様子で懇願するので、用事でも思い出したのかと俺は慌てて急ブレーキをかける。

「見て、人工衛星！」

しかし、よんは呑気に天頂を仰ぎ、夜空の一角を指差した。

この辺りはまだ東京の郊外とはいえ、満天の星空が期待できるほどではない。春の嵐のおかげで雲は一片も見当たらなかったが、三等星までがかるうじて確認できるくらいだ。

よんが指し示した辺り、ちょうどしし座のレグルスの脇を、赤と白の光が明滅を繰り返しながらゆっくりと横切っていく。

「えーっ。あれ違うだろ」

「そうだよお。あたし前も見たことあるもん」

振り向かなくてもよんが頬をふくらませているのが分かった。

いまいち納得できない俺の耳に、遙か上空から微かに「ゴオオオ……」というジェットエンジンの音が聞こえてくる。国道へと続く幹線道路ににいるが、車の通りはほとんどないため、聞き間違いではない。

「飛行機だよ」

俺が断言すると、よんは反論しようと口を開きかけたが、にわかには押し黙ったあと「えゝ、違うと思うけどな……」と自信なさげに小さくつぶやいた。猛反発が来るのかととっさに身構えた俺は、その反応にいささか拍子抜けする。

「そろそろ行くぞ」

いつまでも名残惜しそうに、去って行く明かりを目で追いかけるよんに、俺は一言かけて再び夜の道へと漕ぎ出す。

そのまま夜空を眺め続けているのか、よんは長いこと沈黙を保っていた。

「今さあ、作ってるんだよね？」

「何を？」

「何だっけ……銀河ステーションじゃなくて……」

「ああ、宇宙ステーション？」

「そう。それ」

「日本の実験棟を完成させるのに、今度日本人宇宙飛行士が長期滞在するとか言ってたよな」

「そうなんだ。——いいなあ……」

「何？ よんって宇宙に興味があるの？」

「えー、ザキはないの？」

興味があつて当然という切り返しをされ、俺はしばし言葉に詰まつた。

「いや、俺だつてないわけじゃないけど……」

「あたしはさあ、宇宙旅行するのが夢なんだ」

「えーっ……」

今度は俺が失笑する番だ。

「そんな簡単に行けるかよ」

「行けるよ。知らないの？ 日本の旅行会社だつて宇宙旅行企画してるってあるんだよ」

「だつてさあ、金かかるじゃん」

「まあ、最低でも二千万くらい必要みたいだけど」

「二千万って、下手したら家買えんだろ」

「うん……だからさあ、宝くじとか当たればいいのになあ。一億円当たったら二千万くらいどーんと使えるのに」

今度はひどく子供じみたことを言い出した。どっちにしたって俺たちには高嶺の花、現段階では大部分の人間にとって夢物語でしかない。

「宇宙から見たらさあ、あたしたちってバカみたいに見えるんだろうね」

「”たち”って、俺も入んの？」

「うん、入る」

そりゃどうも。

「バカつてことはないんじゃない？」

「うん……でもさあ、悩みとか争いとか、やっぱすぐくちっぽけに見えるんだろうなあ……」

それが心底羨ましいと言いたげなよんの言葉は、俺の耳に届いたあと、夜風の中に消えていった。

「でもさ、けつきよく人間は地球の上で生きてんじゃない？ 宇宙飛行士だって、地上に戻って毎日生活してたらそうそう達観してるわけにもいかないだろうしさ」

「……そうだよね……」

意外にも、よんは俺の言葉に素直に同意した。

アメリカの女性宇宙飛行士が恋敵を襲撃するため一六〇〇キロの距離を車で横断したって記事を以前読んだことがある。

日々の悩みや苦しさから解放されたいと誰もが望み、そうなれる立場の人間に多くの人間が憧れるんだろう。よんのように。だけど、それが叶わない願いだということも大部分の人は知っている。

「まあ、いつか行けるといいな、宇宙旅行」

別によんを励ますつもりはなかったが、俺は自然にそう声をかけていた。

「その時はザキも連れてってあげてもいいよ。宝くじ当たったらね」

「おう。期待しないで待ってるわ」

「行ってみないと分かんないもんね。何が変わるか」

それとも変わらないか。

変わるものの中にも変わらないものの中にも大切なことはあって、それが自分で選び取っていくものならば、何かに立ち向かうことも無駄ではないんだろう、多分。俺には言い切ることはできないけれど。

例え静かな心を手に入れて達観できたとしたって、宇宙にひとりぼっちじゃ意味がない。それなら、地上の荒波の中にいた方がまだ

マシだ。

背中に息づく気配を意識して、俺はペダルを踏み込むとさらにスピードを上げた。

この夜に、一人ではないことを感謝したかった。

第二話 夜に産まれる

この夜に一人ではないことを感謝したかった。一人だっただけで気分がささくれて、荒れていたはずだ。山中亮太は風呂から上がって、居間に妻の姿を見つけ、無意識にホッと溜め息を吐いていた。「まだ起きてたの？」

髪をバスタオルで拭きながら、台所の冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出す。

「飲む？」

居間のソファにあぐらをかき、低速ながらブラインドタッチでノートパソコンに文字を打ち込んでいる妻に亮太は声をかけた。木目調のリビングテーブルに置かれた携帯ラジオからはムーディな曲が流れ、部屋を満たしている。最近妻はこの作業スタイルがお気に入りらしい。

「ん、いいや」

「何？ 珍しいじゃん。あ、もしかしてもう飲んだ？」

「そうじゃないけど、今日はいいや」

時刻は既に夜中の一時をゆうに回っている。当然二人ともパジャマ姿だ。結婚して五年たつが、子供のいない二人はまだまだ恋人気分をどこかに引きずっていて、パジャマはおそろいの色違いだった。

「それ、仕事？」

「うん、そう」

「急ぎなの？ 締め切り迫ってる仕事あったっけ？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

亮太の妻は静子という名前だ。今年三十八になる亮太の七歳年下で、彼が以前勤めていた、海外とも取引のある中堅どころの物流会社の同僚だった。結婚後、しばらくは専業主婦に徹していたが、三年ほど前から小さな出版社の契約社員として英語の下訳の仕事を請

け負っている。元々英文科の卒業で、物流会社でも海外事業部に所属していたため、翻訳の仕事には以前から興味があつたらしい。

興が乗っていたのか、静子はノートパソコンの画面から目を離さず、亮太の言葉に生返事をした。

「で？ お店の方は大丈夫だったの？」

亮太が対面式のキッチンからビールを飲みながら妻のそんな様子を眺めていると、キリがよくなったのか、静子はようやくノートパソコンを閉じてそう尋ねる。

「とりあえず朝井さんが来てくれたから大丈夫」

「朝井さんって今副店長だっけ？」

「そう。勤続二年だからね。まあ、うちみたいなフランチャイズのコンビニじゃ、名ばかり管理職もいとこだけ」

「普通、夜中は女性入れないんでしょ？」

「一応もう一人フリーターの男の子がいるから」

「その子は最初からシフト入ってたの？」

「うん。朝井さんも主婦だからホントは入れなくなかったんだけど、他のバイトは断られちゃったし、急遽連絡したら二つ返事で来てくれるっていうからさ。『もう四十すぎだから徹夜はキツイわ』なんて笑ってたけど」

「でも、よかったね。亮太くんだって、昼間の10時からお店に出てたんだから、ぶっ続けはムリでしょ」

「俺も歳だしねえ。あ、だけど明日……つつつか、もう今日か。六時頃起きて朝井さんと交代するから」

「えーっ、そうだったんだ。じゃあ早く寝なきゃじゃん」

「まだ、いいよ。これ飲み終わってないし」

パソコンを手に慌てて寝る仕度を始めようとする妻を、亮太は 약간わりと制した。

亮太が父親からコンビニの経営を受け継いだのは、三年前のことだ。亮太の実家は元々酒屋だった。しかし、昔ながらの店構えや品揃えでは時流に太刀打ちできず、亮太の父親は6年前に一念発起す

ると酒屋を閉め、ある大手コンビニのフランチャイズに加盟し一店舗を開業した。そもそも息子に残すことを視野に入れた転身だったらしく、亮太が脱サラして後を継ぐ決意を見せるや否や、自分はさっさと楽隠居として東京の郡部に移り住み、今では亮太の母親と二人でカルチャースクールだ旅行だと第二の青春を謳歌している。

「それにしても、まったく今時の若者は軟弱だよなあ……」

「ああ、その、捻挫して来れなくなったってバイトくんのこと？」

「そう。何だっけ？ 大学の帰りに風にあおられてよろけた時に縁石につまずいて足をひねった、とか言ってたっけな」

「スポーツとかやって鍛えてなかったのかね」

「やってなくてもさあ……バランス感覚悪いんじゃないの？」

「まあ、今日風強かったし……」

春の嵐とはよく言ったもので、ここ数日風の強い日が続いていた。今日も朝から強風が吹き荒れ、二人が話しているこの時間になっても時折思い出したかのような突風が、マンションの二階にある部屋の窓ガラスを震わせる。

亮太たちの住む2LDKのマンションの一室は、二人が結婚した時に購入したものだ。中古のため値段が手頃で、経営するコンビニから徒歩5分とかからない立地条件が最大の魅力だった。住宅街の中の四階建ての低層マンションで、築十五年のわりには造りもしっかりしていて戸数が少ないせいかな他の住人たちとも入居当初から良好な関係を保っている。

亮太自身も決してスポーツマンというわけではない。会社員時代には接待ゴルフにもお呼びがかからなかったため、まともに運動をしたのはもう十数年以上前のはずだ。それでも、そろそろ中年太りの兆しも見えようかという年齢にも関わらず、スラリとした体躯を保っているのはコンビニ経営が予想以上に大変なためか。

亮太の口から世の若者に対する愚痴が出てきたことが何だかおかしくて、静子はこっそり苦笑すると肩までのソバージュをさらりとかき上げた。

「亮太くん、何だか疲れてる？」

やはり恋人時代の名残で、静子はいまだに亮太のことを”くん”
付けで呼ぶ。

「ああ……うん、少し」

「何かあった？」

「もうすぐ年度末の決算じゃん？」

「あ、そういえばそうだったね」

「それで今日、決算書作るのに年間の収支計算してたんだけど……」

「あんまよくなかった？」

「あゝ、ちよつと厳しい。前年度と比べると明らかに収益が減つて
るよな」

「赤字出ちゃった？」

「いや、まだかるうじて黒字だけど……」

「やつぱり、不況が響いたかね」

「それもあるけど、一番の原因は、ホラ……」

「ああ、あつちかあ」

亮太の経営するコンビニは幹線道路沿いの十字路に面した好立地だ。元は山中家の自宅兼酒屋があった。コンビニ開業を決めた時、亮太の父親は両方つぶして広い駐車場を備えた店舗の建設を計画した。その方がマイカー族への利便性を提供できるからだ。もっともおかげで夫婦そろって山際の畑付き住宅への引越しを余儀なくさせられたのだが。

本人たちは「これもまた人生」と半自給自足の生活をも楽しんでいるらしい。

ところが、つい昨年わずか一ブロック先に、別の大手コンビニチェーンが進出してきた。道の反対側ならばまだ利用者も分散したのかもしれないが、何を狙ったのか新店舗がオープンしたのは物理的に全くの同一線上で、二店舗で客を奪い合うという最悪の展開になっている。

売り上げが落ちたのはもちろんそのせいだ。

「もしさあ、もしもだけど、コンビニの経営がダメになっても、何とかなると思うか？」

「そんなに危ないの？」

「いや、まだ赤字が出たわけじゃないし、一度や二度の赤字でどうにかなるってことはないけどさ。設備投資だつて回収しきれないところあるし……」

要するに、亮太はいささが気弱になっているらしい。

「家計は別にしばらくは問題ないでしょ。貯金だつて少しはあるし、住宅ローンは残っているにしても、私の仕事も軌道に乗ってるし……」

「そつか。ならいいんだけど」

「元気だせ、亮太くん」

「うん……あーっ、自分に経営の才能があるとは思わないけど、それなりに勉強もしたし、親父だつてせっかく任せてくれたのにな。現状が数字になるとやっぱへこむよなあ。おまけに、今日なんか万引き客までいるしさあ」

「え？ そうだったの？」

「ちょうど朝井さんと交代の引継ぎしてる時だつたし、まあ大したもん盗られたわけじゃないけどな」

「何盗られたの？」

「あの、ホラ、ケース入りのガムあるじゃん。六百円くらいの」

「ああ、分かった」

「何となくやるんじゃないかとは思ってたんだけどねー。店内ウロついてるわりには結局何も買わないで出て行つたしさ。後から防犯ビデオ調べたら、案の定」

「常習犯？」

「いや。たまに来るけど、万引きなんかしたのは今日が初めてだと思っけどな。真面目そうなコだつたしね」

「いくつくらいのコ？」

「高校生くらいかな……男の子でさ。自転車であつて……店出てか

ら外にいた女の子とどっか行つたみたいだったけど」

亮太は、そこでビールを飲み終わると、無造作に空き缶をゴミ箱に捨て静子の隣にドサツと腰を下ろした。

「ま、でもさ。万引きって珍しくないじゃん？ 月に二・三回はあ
るでしょ？」

「そっただけさあ……。こっちは赤字になるかもってハラハラして
る時に、そういうことされるとやっぱム力つくだろ」

「それも含み損なんじゃないの？」

「実際の収益の問題じゃなくて、気持ちの問題だよ」

亮太の方が歳は上なのだが、二人でいる時にはどうしても静子に
精神的に甘えてしまう。見かけは有能なOL風で、性格もサバサバ
している静子だが、どこか包み込むような温かい雰囲気を持ってい
るからだ。

「きつとさ、何かあつて魔がさしたんじゃないの？」

「万引きする奴はみんなそういう言い訳するよ」

「それは知ってるけど。高校生くらいのコつてただでさえいろいろ
悩み抱えてるじゃない？ そのコもストレスが溜まってたとか、学
校でイジメにあつてるとか、何か鬱憤を晴らしたくてそんなことし
ちゃったんじゃないのかな」

「例えそうだとしてもさあ。他人に迷惑かけていい理由にはなんな
いじゃん？ こっちは必死になつて働いてんのにさ」

「だって、考えてもみてよ。そのコがもし自分の子だったら、やつ
ぱり庇つてあげたいし信じてあげたいじゃない」

「そーは言つてもなあ……」

実際子供いないんだし、と言い掛けて亮太はあとの言葉を飲み込
んだ。結婚して五年、夫婦仲もいたって良好なのに子供ができない
のは、主に亮太の方に原因があるらしい。二人とも医者に行き確認
したのだが、日常的な交接で妊娠する可能性も低くはないというこ
とで、不妊治療などせず気長に待とうと二人で決めていた。ただ、
日頃子供に関する話題は自然と避けるのが暗黙の了解でもあった。

「亮太くんだったって、その内分かるよ」

「え？　どういうこと？」

そう続けられた静子の意味深なセリフに、亮太はいささか虚をつかれる。

口調は亮太を咎めるものだったが、亮太が静子に向き直ると、妻の顔に浮かんでいたのは、どこか不自然な含み笑いだった。

「……まさか……」

その表情に、ある予感を覚えて亮太は一言だけつぶやき、すぐに絶句してしまう。

「えへへ」

いたずらが見つかつた子供のような静子は、満面の笑みで小さくVサインを作った。

「できたのか！？」

「三ヶ月だって」

「ホントに！？」

「おととい病院行ってきたもん」

さらに静子は得意げに胸をそらせる。亮太は、信じられないというように口をあぐりと開けたまま半笑いの表情で固まっていた。

「早く言おうと思ってたんだけど、亮太くん忙しそうだったし、疲れてるみたいだったからさ」

「そんなことないよ！　早く聞きたかったよ！　何ですぐ言わなかったんだよ！　……ああ、もう何でもいいや。やったな！！」

いささか興奮気味に上気した顔でそういうと、亮太は喜び全開で静子を思い切り抱きしめた。

「苦しいよー」

文句を言いながらも、静子は亮太に体重を預ける。

「男？　女？」

「気が早いなあ。まだそんなの分からないって」

「どっちでもいいっか、無事に産まれてくれれば」

早くも先走りしだした亮太の浮かれ具合に、静子はこっそりと苦

笑した。

「意外だなあ。亮太くんそんなに子供ほしかったんだ？ あんまり子供好きじゃないみたいだったし、ちょっと……今さら面倒くさいみたいに思われるかもって不安なところもあったのに」

「俺だって意外だよ。正直、面倒くさいって思ってたもん。俺一人っ子で従姉弟たちにも小さい子いないし、どう扱っていいのか分からないからさ」

「でも、嬉しい？」

「嬉しいに決まってるじゃん！ あー、やっぱり何だろうなあ、自分の子って思うと全然違うんだな。今一気にモチベーション上がった」
「ここでようやく亮太は静子を腕の中から解放した。そして、いとおしげに静子の下腹部を見つめる。」

「お、急にやる気出たね」

「おお。頑張んなきゃな。弱音吐いてる場合じゃないし」

「それにさ、コンビニがダメになっても別にまた、サラリーマンに戻ればいいだけの話だし」

「そーだよなつ。よしつ、ちょっと復活」

あっけらかんとした静子の起死回生の言葉に、亮太は軽いガッツポーズで気合を入れる。

「だからさ、その万引きの子も許してあげなよ」

「ええ？ それとこれとは話が違うじゃん」

「見逃してやれって言うてるんじゃないくてさ。もし今後『すみませんでした』って謝りに来たらさ、広い心で受け止めてあげてってこと」

静子が、少しだけ亮太を窺うようにそう告げると、亮太はしばらく考えこんでいたが、やがて勢いよく頭を上下させた。

「そうだよな。その子にだって親御さんがいるんだろうし、何か原因があつてやったことなら、それをちゃんと聞いてやらないとな」

「そーいうこと。自分の子がそんなことしたら、悲しいけどやっぱり頭ごなしには叱りたくないし」

「そうだな」

二人は、そこで顔を見合わせると何度かうなずきあった。

「あつ、もしかして、さっきビール飲まなかったのはそのせいかな」

「なに？　今気付いたの？」

「それに、もしかして、このこと言うために俺が帰ってくるまで起きてた？」

「うーん、まあね」

静子は、はにかむように笑う。

「おつ、もうこんな時間じゃん。そうと決まったら早く寝ようぜ。体に負担かけるのもあんまよくないんだろ？」

「そうだね。じゃ、寝ようか」

静子は、同意して立ち上がる。亮太は無意識にそれに手を貸していた。

気がつくと、テーブルの上のラジオから先程まで流れていたゆったりとした曲調の音楽は終わり、次の番組がポップミュージックと共に始まっていた。

『Good evening everyone！

How are you feeling tonight？

皆さん、こんばんは。今夜も私、藤沢ミッシェルがお送りする”The other side of the day”の時間がや
って参りました……』

第三話 ミッドナイトラジオ

『Good evening everyone!
How are you feeling tonight?』

皆さん、こんばんは。

今夜も私、藤沢ミシエルがお送りする”The other side of the day”の時間がやってきました。

毎回テーマに沿って皆さまからの情報や便りをご紹介しますこの番組、今週のテーマは……そう、”宇宙”。

宇宙に関する皆さんの思い出やスポット・お店の情報、曲のリクエストもまだまだ受け付けていますので、よろしく願いします。

それでは、これからの十五分間、どうぞリラックスして、お付き合い下さい。

今日まず最初は、東京都のラジオネーム「地球はそれでも青かった」さんからの曲のリクエストにお答えして、”The Beatles”で”Across the universe”^①

『アメリカのスペースシャトル、また打ち上げ延期になりましたねえ。』

今度は日本人宇宙飛行士も宇宙ステーションに長期滞在ということ、皆さんの期待も大きいのではないかと思います。

でも、宇宙ステーションって結局なんなの？ というリスナーの方

々も多いのではないのでしょうか？

そんな皆さんにお勧めなのが、茨城県はつくば市にある「JAXA 日本宇宙航空開発機構 筑波宇宙センター」です。

こちらは、さまざまな研究実験や開発、人工衛星の管理に宇宙飛行士の養成まで行っているJAXAの重要な施設で、私も行ったことがあるんですけど、かなり広いですよ。

見学者のために一部解放された参観コースがありまして、それに参加すると国際宇宙ステーションの日本の実験棟、「きぼう」の実物大モデルも見られます。

ガイドの方がいて、いろいろ説明してくださいますよ。

東京からだと、筑波エクスプレスも開通して大分近くなりましたから、興味のあるリスナーの皆さんは是非一度訪れてみてはいかがでしょうか？

JAXAの施設は他にも種子島宇宙センターとか、都内にもね、何箇所があるみたいなので、これから春休みですから、そちらにも足を運んでみるとまた宇宙に対する知識が一步深まるのではないかと思います」

『それでは、一枚目のおハガキをご紹介します。愛知県の大学生でラジオネーム……そら？ さんから、でいいのかな？ 宇宙の宙と書いてそら、さん。からのお便りです。』

“ミシエルさん聞いてください！”

はい？ 何でしょうね。

“僕には高校の時から付き合ってる彼女がいるんですが、この間デートでプラネタリウムに行ったんです！”

僕の家近くには結構クオリティの高いプラネタリウムがあって、

噂には聞いてたけど行ったことがなかったんで、彼女を誘って初めて行ってみたんです。

満天の星空って普通じゃなかなか見られないけど、プラネタリウムだったらロマンチックなんじゃないかなあって思ってた……。

それなのに、彼女はプラネタリウムが始まったら速攻爆睡ですよ！

付き合い始めて長いし、最近倦怠期になって思ったから、僕なりに雰囲気盛り上げようと思ったのに……。

おかげで、彼女とはケンカになって、今微妙な関係が続いてます”

……フフフ。—— すいません、笑ってしまいました。

笑い事じゃないですよね。

これはさすがにイタイですね。

プラネタリウムってたでさえ暗くなったとたん眠くなりますもんね。

でも、これはちょっと、彼女が悪いですよねえ？

微妙な関係って…… どうなんだろう？

修復できそうなのかな？

もう一度、今度は彼女が絶対眠らなそうなロマンチックスポットに連れて行って見たらどうか？

そろそろ桜も咲く頃だし、夜の観覧車なんかもね、私としてはお勧めです。

でも、羨ましいなあ。

このおハガキではもう長いこと付き合ってるみたいに書いてありますけど、なんか、いいですよねえ。

若いつて。—— あ、自分がオバさんだって認めてしまいましたね。そんなことないですよ、私もまだまだ若いですっ”

『さて、気を取り直して、二枚目のお八ガキは、福岡県のAKG4
8さんからの質問です。』

“ミシエルさんこんばんは”

はい、こんばんは。

“僕はいつも自転車で学校に通っているのですが、この間夜帰るときにふと疑問に思いました。

テレビを見てると宇宙は黒いですが、地球から見上げた時には深い青色なんじゃないかと思うんです。

本当は何色なんですか？”

何色なんでしょう？ 私はよく飛行機に乗るんですけど、国際線で高度の高いところを飛んでいると青い空がだんだん鈍い色に変わっていくんですね。

宇宙に近いんだなあって勝手に關心してるんですけど。

この質問には、江東区にある科学館の研究員の方に答えていただきました』

——まず空の色についてですが、太陽の光は「白色光」といつて本来は白いですね。

でも、これをプリズムによって分けると屈折率の違いで虹の七色が表れるわけです。

その七色の光は大気中で空気分子にぶつかると散乱します。

波長の長い赤系統の光だと散乱は起こりにくく、逆に波長の短い青系統の光だと十倍以上も散乱しやすいわけです。

それが我々の目に届いて空が青いように見えるわけですね。

——次に宇宙の色ですが、宇宙はほぼ真空なので、太陽の光はそこを通過するだけで散乱しません。
宇宙には細かいチリのようなものはあっても、それが光を反射したり拡散させることはないんですね。
それで、真っ暗だから宇宙は黒いというわけです。

「はあ、そういうことなんですね。

お分かりいただけたでしょうか？

宇宙って本当に奥が深くて魅力的ですよ。

スペースシャトルの打ち上げも、今度こそ成功してほしいものです。
宇宙での長期滞在が成功すれば、私たちもいつか地球から離れて生活することができるようになるかもしれないですね。
そんな未来を、ちょっと夢見ちゃったりして。

今夜もそろそろお別れの時間がやってまいりました。
今日最後に皆さんにお届けするのは、ホルストの組曲、「惑星」より「ジュピター」

それでは、また次回お会いしましょう。

Did you enjoy this program?

お相手は、藤沢ミシエルでした。

Now, time to sleep and go to t

H h
a a
v v
e e
a .
n
i
c
e
d
r
e
e
m
.....
『

第四話 夜間急行便

それでは、また次回お会いしましょう。

Did you enjoy this program?

お相手は、藤沢ミシエルでした。

Now, time to sleep and go to
the bed.

Have a nice dream……」

カーラジオから眠気を誘うクラシック音楽が流れてきたのに気がき、秋山はラジオのスイッチをオフにした。

いつも聞いていた番組が終わっても選局せずそのままにしていたのだが、この時間のクラシック音楽はそれがどれだけ激しい曲調であつても瞼が重くなる可能性大だ。

しかも、どの番組を回してもほぼ変わらないパーソナリティーの流暢な英語。あれも思考を麻痺させる一因だ。何故英語の部分だけあんなにネイティブなのか、そもそも日本語が話せるなら全部日本語で通せばいいではないか。秋山は何度そう思ったか分からない。最近では、あのネイティブイングリッシュ交じりのナレーションが聞こえてくると反射的にラジオのスイッチを切りたくなる。たまには、英語ではなく中国語だのロシア語だのが流暢なパーソナリティーがいてほしいものだ。日本でのラジオ普及が元々アメリカ文化の流入によるものだから、という解釈が成り立つのは分かるが、秋山にはどう考えてもパーソナリティーの虚栄心の表れにしかすぎないよ

うに感じられた。もしくは、現代の日本人の学力水準ならばあれくらいに英語は分かっているべきだ、という暗黙の了解でもどこかに存在しているのだろうか。

学生時代英語が苦手で、大学にも進学しなかった秋山は少々ひがみ根性でそんなことを考える。

パーソナリティの名前も日本名と外国語名を組み合わせたようなものをよく耳にする。英語の発音が本格的なのは、ハーフだからか以前やはりラジオ番組の中で、ある有名な中年男性のラジオパーソナリティが何故流暢な英語を話せるようになったのかを紹介していたことがある。彼は純日本人でアメリカ等に留学した経験もないのだが、若い頃かつてのFEN放送だかを毎日のように聞いて、ひたすら流れてくる英語を真似して練習したのだという。当時はまだアメリカが日本人にとつての憧れで、ラジオから聞こえてくる流れるような英語はさぞや格好よく響いたのだろう。そんな努力をして身に付けた英語は耳に心地よく、秋山は彼の番組を好んで聞くことにしていた。

音のなくなった車内はとたんにシンと静まり返り、秋山はいいよのない心細さに襲われる。

三トントラックを運転して、大阪へ荷物を届けた帰り道。国道129号を平塚の営業所へ向けて南下している。現在時刻は午前二時二十五分。珍しいことではない。同僚たちだつて今頃夜通しどこかの道を走っているはずだ。昨年以来の世界不況のおかげで、積荷の量は減り、仕事の委託も三分の二以下になった。秋山の勤める運送会社は本来社員に対する雇用待遇はこれ以上なく良心的なのだが、それでもこの不況下で生き残るには少々条件の悪い業務内容にも甘んじる覚悟が必要だ。秋山は、もうここ何ヶ月もまともな時間に帰宅したことがなかった。

高卒直後から勤め始めて今年で勤続二十七年。20代の終わりに親戚に勧められ二歳年下の女性と見合い結婚をし、今では中学二年の娘と小学六年生になる息子がいる。

秋山は、家族写真の貼つてあるダッシュボードにチラリと視線を馳せた。子供たちが小さい頃、正月に家族で熱海温泉に行った時の写真だ。

まだこの頃は幸せだった。

いささか感傷的になり、秋山は不覚にも涙が沸きあがってくるのを感じ、必死で堪えた。ここしばらくでとみに涙もろくなっている。一月前に妻から離婚を言い渡された。

今、秋山は親権や慰謝料を巡って妻と係争中だ。最低でも週に一、二回は弁護士と打ち合わせをせねばならず、進行状況は電話で毎日報告を受けている。本訴までいかず和解に持ち込んで協議離婚、というのが最も典型的で穏便な解決方法らしく、秋山もその方向での収束を望んでいたし、弁護士も相手側との方向性の意思確認は完了しているとのことだった。ただ、妻の方が条件などの問題でこねているらしい。

妻が離婚を提示したのは、秋山が「家庭を顧みない」から、だという。長距離輸送のトラック運転手のため、秋山は結婚以来一月のほとんど家を開けている。帰宅できたとしても妻子の就寝中が多く、家族間の交流もままならない。子供たちの授業参観や運動会にも一度も顔を出したことがなく、休日もまちまちだ。昨年初めからは収入も減り、妻はパート従業員として働き始めた。子供たちの助力もあるとはいえ、秋山の妻は仕事に主婦業、そして母親として这一年ほど忙しさに目の回る思いだったらしい。ついには身体と心に支障をきたし、全てが立ち行かなくなってしまった。

秋山の妻は、決して金持ちの箱入りのお嬢様というわけではない。埼玉出身のいわゆる中流階級で、大学卒業後花嫁修業程度に親戚の会社で事務員の仕事をしていた。ただ、両親は大手企業の社員で、母親の方は結婚を機に退社したものの、家庭は比較的裕福で、一人っ子だった秋山の妻も何不自由なく、秋山と結婚するまでは苦労らしい苦労もせずに育ったらしい。その分おっとりとしていて育ちはよく、反面晩生すぎて異性との交際も経験乏しく、見合いすること

になったのだという。

秋山自身は群馬県で母子家庭に育った。父親は小学生の時に家を出て行き、いまだに消息不明だ。もともとヤミ金だの裏の仕事に関わっていたらしく、そのことで事件に巻き込まれた可能性もあるらしい。母親は水商売や農作物の出荷作業のパートなどをしながら女手一つで秋山を育てた。秋山自身は中卒で働きに出るつもりだったが、母は少々無理をして高校まで行かせてくれた。母の期待に答え、楽をさせるべく秋山は必死に頑張った。しかし、学業で人より抜きん出ることではなく、就職でも運送会社にやつのことで採用された。

見合いの後、結婚が決まる前に秋山は自分の生い立ちと苦労させるかもしれない旨を正直に彼女に話した。知り合いの知り合いを介しての見合いだったが、看板に偽りのない良縁で、秋山は自分にとってもつたないくらいだ、と当時思ったほどだった。だから、お互い全て納得した上での結婚だと勝手に解釈していたのだが、そんな生い立ちもあって、妻は秋山との結婚生活に耐えられなくなったのだろう。これは、自分が思い描いていた幸せな家庭と違う、と。

秋山の妻が描いていたのは、お菓子の家に住み、御伽噺のような結婚生活だったのかもしれない。それでも、結婚して十六年、それまで秋山に意見することも愚痴を言うこともなく、姑を大事にし、ひたすら粛々と家庭を守り続けてきた妻が、初めて自己を主張しわがまを口にしたことに、抵抗する術を秋山は持たなかったし、反論する気もなかった。

というより、疲れていたのだ。

秋山にも言い分はある。帰宅が遅いのも世間並みの休暇が取れないのも、子供たちの学校行事に参加できないのも、自分のせいではない。自分はいつだって家族の望みを叶えてやりたかった。しかし、仕事があり会社の都合がある。家族を重んじるあまり仕事をないがしろにして、そのため家族を路頭に迷わせるような結果は本末転倒だ。それとも、その方がまだ幸せだとでもいうのだろうか。現状は

世界的な不況が追い討ちをかけ、社員が一丸とならなければ会社そのものの存続さえあやういというのに。秋山は資格も技術も他の取り得もない。トラックの運転手以外に自分にできる職種があるかどうかは疑わしい。

全ては家族のため。家族のためなのだ。

……それなのに……

家族のために頑張れば頑張るほど空回りし、妻子との距離が遠ざかる。このままでは上手くやっていく自信がないと妻に泣かれ、秋山は一も二もなく離婚に同意した。

疲れていたのだ。お互いに。心安らげる場所が欲しかっただけに、現状では双方ともにそれを相手に提供することができない。それは負の循環を呼び、気持ちをすれ違わせる。

秋山は特に暴力を振るったわけではない。暴言を吐いたり妻と言い争いをしたことも一度だっただけでなかった。むしろ妻に対して常に遠慮していた。それでも離婚に同意したのは、妻に分かれてくれと言われたとたん、全てが徒労のような気がし、体の力が抜けて争う気力すら瞬時に奪われたからだ。心が折れた、と言ってもいいかもしれない。いつだって家族のことを思い、その幸せを実現することに努力してきたつもりだ。明け方に帰宅し、布団に眠る妻や子供たちの顔を目にするだけで頑張ろうと自分に言い聞かせた。長い夜道の運転も家族のことを思えば辛くは感じなかったのに、相手は全くそうではなかった。それは自分の独り相撲だったのだと思い知らされ、眼前にそのことを突きつけられ、秋山は打ちのめされてしまった。

”つもり”だけでは何一つ繋ぎとめておくことはできないのだ、とどちらが悪いというわけではないというのは分かっている。妻のわがままだ、と言い切ってしまうのは簡単だ。だが、秋山だって自分がない間の家庭について、妻子がどんな思いで時間をすごし、どんな寂しさや苦勞を抱えてきたのかを知っているわけではない。だから、逆にお互いさまなのだとも思った。

妻は昨年末に子供を連れて実家へ戻ってから帰ってこない。同居

していた母親は一昨年に他界し、一階建ての借家には、今秋山一人で住んでいた。

最近では、借家にはほぼ寝に帰るだけだ。妻子が日常の生活の中から姿を消し、秋山は初めて自分が一人だと思った。トラックの中でも孤独だけが身にしてみても、妙に涙もろい。精神的に頼るものがない不安感を、秋山は今さらのように理解した。家族がいなくなったら、こんな思いをしてまで働く理由がどこにあるのか、と自問する。しかし、今後慰謝料を払うにしろ、養育費を払うにしろ金は必要だったし、それらを通して家族を養っていると思えば、少しは報われるのかもしれない。

言葉を交わす相手のない運転席で、秋山の脳裏に多少自虐的な思考が浮かんだ。

深夜の国道129号線は、さすがに自家用車の数は少ないが、輸送トラックはひっきりなしに往来している。それで渋滞を引き起こすほどではないが、何も考えずにスピードを出せるほど交通量は少ない。

当然歩行者や自転車の姿など数えるほどしか見当たらない。そんな中、左手の歩道にトラックと同じ方向に走る自転車を見つけ、秋山はおやつと思った。そろそろ厚木のインターが近づいてこようかという地点だ。こんな時刻に、と物珍しさもあり、追い越す時にチラッと視線を向けると、自転車には若い男女が乗っていた。漕いでいるのが男の子で、荷台には制服姿の女子高生らしき姿。春休みも近いため少しハメをはずして遊んだ帰り、とういうことなのかもしれないが、それにしてももう夜中の二時を過ぎている。親が相当な放任主義なのか、と秋山は少し腹が立った。もしそれが自分の子供だったら、大目玉を喰らわせているはずだ。

自転車は銀色のクロスバイクで、かなりの速度が出ていたはずだが、トラックに叶うはずもなく、秋山がつらつらと考えているうちに後ろへ遠ざかってしまう。

まさか家出などではないだろうが、今時の若い子は昔よりずっと

自由なのだな、とふと思った。そして、その若さが羨ましいと。

そこで急に自分が歳を取ったことを実感したというわけではなかったが、あんな時代にはもう戻れず、懐かしいと思うほどには歳を重ねてしまったのだな、と秋山はしみじみ思った。

と同時に、自分と妻の若い頃のことを自然と思い返していた。秋山と妻が見合いをし、結婚が決まってから式を挙げるまでは三ヶ月あった。だが、その三ヶ月はほとんどが式の準備に当てられ、二人が交際らしい交際をした記憶はあまりない。当然自転車の二人乗りをしたこともなく、妻との間に甘い思い出は皆無だった。

それでも自分と妻の昔のことを思い出したのは、クロスバイクの二人が何だか初々しく思えたからだ。見合いを介して出会い、式の準備に追われながらもこれから始める生活に対する期待と不安でいっぱいになり、新婚生活が意外にも順調で快適だった頃。二人の初めてのに、この人が自分の妻になり、二人で家庭を築いていくのだと喜びを覚えた瞬間、胸に芽生えた甘酸っぱい衝動。子供が産まれ、新たな責任感と一人前の男としての自負心に目覚めた日。

あれが幸せというものではなかっただろうか。あれこそが、幸せというのではなからうか？

今の今まで忘れていた、否、感情そのものは味覚と同じように記憶にとどめておくのは難しい。だから、呼び覚まされたと言った方が正しいのかもしれない。秋山の心に当時の感情がありありと蘇った。

妻を嫌いになったわけではない。愛していると口にしたこともなければ、激しい恋愛感情を抱いたこともない。だが、もし秋山の心の中を一貫して占める穏やかな妻に対する感情が愛と言えるのなら、秋山は確かに妻を愛していた。

だから、これでいいのかもしれない。憎みあつて別れるのではない、お互いに疲れ、目標を見失っていただけなのだ。だから、例えば離婚して戸籍上他人になったとしても、いつか分かり合い許し合える日が来るに違いない、と。秋山は信じたかった。そして、そのこ

とを妻に伝えたかった。

さらに、それならばこれはある種の休憩時間なのかもしれないな、と秋山は続けて思った。人生の休憩時間。一度立ち止まって自分自身を見直し、学び直すための。それが過ぎれば、英気を充分に養い、また歩き始めることができる。

それならば、あながち悪くはないのかもしれない、と秋山は感じた。

こんな休憩時間ならば、悪くはない、と。

こんな休憩時間ならば悪くはない、とザキは思った。今ザキの座っているテーブルの向かい側には、よんが顔を伏せて寝ている。ドリンクバイキングで選んだ、砂糖なしのカフェオレのカップに手を伸ばしたまま、ついに睡魔に打ち克つことができず、屈服した、という姿勢で。当然はずす暇のなかった眼鏡は、テーブルと顔の板ばさみになり、逃げ場を失っていささか変形し、はずれかかっていた。口を半開きにした、その、あまりにも無邪気で無防備な寝顔に、ザキは一人苦笑する。

二人がいるのは、厚木インターに程近い、国道129号線沿いのファミレスの窓際のボックス席だ。二人が入店したのはほんの二十分ばかり前だが、二十四時間営業の店とあって、深夜三時を過ぎたこの時刻でも、百席はあろうかという店内の一、二割は客で埋まっていた。客はほとんどが深夜族の若者や長距離トラックの運転手らしいが、中には背広姿の中年サラリーマンの姿もある。終電がなくなつて帰れなくなったのか、それとも昨今増加しているという帰宅拒否症候群か。

時間が時間なため、店内には気だるげな雰囲気が流れていて、二、三人いるフロアーの店員の動作もどこか緩慢だ。もちろん、ドリンクバイキングのみのオーダーで嫌がられることもない。

「おい、よん。起きろよ」

二杯目のアセロラドリンクに続き、三杯目のアイスコーヒーをそろそろ飲み終えようかという頃になって、ザキは腰を浮かせるとよんの肩に手を伸ばして軽く揺すった。

「ん……」

鈍い反応は見せたものの、よんは少し頭の角度を変えただけでまた眠りにつこうとする。しかし、状況把握をしなければ、という認

識がかるうじて働いたのか、ひどく緩慢に頭をもたげると、顔を上げてあごをテーブルにつけた。目はまだ半分も開いていない。大振りの眼鏡は斜めにかかり、道中さんざん風に煽られた髪の毛は、まとまりを失って好き勝手な方向を向いていた。もはや二つ縛りにしている意味があまりない。

お笑いのコントにでも出てきそうなよんのその姿に、ザキは必死で笑いをこらえる。

「んー、ごめん。寝てた……」

目の前で肩を震わせるザキに気付いていないのか、よんはのったりと上半身を起こし眼鏡をはずして目をこする。それから、ゆつくりと瞼を上下させた。頭の芯はまだ目覚めていないのだろう。そのまま再び寝てしまいそうだ。

「……大分寝てた？」

「いや、十分くらいかな」

何だかるれつも怪しい。ほとんど会話する者のない店内で、自分たちの声がやけに大きく響くような気がして、ザキは必要以上の小声でそれに応じた。

よんが、ふうつと一つ大きな溜め息を吐く。

「何か、ずっと後ろ乗ってたら眠くなっちゃってさ。……ヒマだし」「いい気なもんだなあ。俺なんかもう三時間弱も漕ぎっぱなしだったんだぞ？」

「……まだ、二時間二十分くらいだよ。サバ読みすぎ」

寝ぼけているわりには、正確な答えが返ってくる。ザキもドリンクバーコーナーの上に掛かる時計に目をやった。

「いいじゃん、そこは」

「途中トイレ寄ったし、ザキ、バイパスとこで道間違えるし」

「しょーがないだろー？ 16号ずっと下ってけばいいのかと思ってたからさ。バイパス迂回しなきゃいけないなんて知らなかったし」「129号に曲がるとこは分かりやすくてよかったね」

「やっぱ、携帯で最初から地図見とくべきだったよな」

それでも、ここまでは思った以上に順調な道のりだったとザキは心の中で自画自賛していた。

「……ザキ、元気だね」

いまだブーツとした表情のよんが、億劫そうな口調でつぶやく。

「おお。ずっと漕いでたし、有酸素運動ってーか？ 何かアドレナリン全開って感じで、逆に目が覚めてるよな」

「なんだ、ハイになってるだけか」

「……いや、疲れてはいるんですけど」

少し調子を取り戻してきたのか、よんがねぎらいの言葉もなく冷たく言い放つ。ダメ元なのは分かっていたが、ザキは小さく現状を訴えてみた。

「お疲れ」

即座に、ほとんど棒読みのよんの言葉が返ってくる。

「ふわぁーっ……」

続いて、口を手で覆うでもなく、よんがおよそ淑女らしからぬ大きなあくびをした。先程から頻繁に目にするよんのこういう素の部分が、マイペース過ぎる彼女をなんとなく憎めない理由だろう。

「そろそろ行くか」

「あ、じゃあトイレ行ってくる」

「ん。じゃ、俺先に会計すませてるわ」

今はずしたばかりの眼鏡とスクールバックと、ザキが貸したマフラーを手によんがトイレへ去っていくのを見送り、ザキはレシートを手にはレジへ向かう。

無言の取り決めがなされた記憶はなかったが、拒否権もなくザキが金を払うことになってしまっていた。たかだか六百円ほどのことだし、大学合格祝いに両親や祖父母からたんまりと小遣いを支給されていたので、まあいいか、とザキは自分を納得させる。これくらいで男の甲斐性を持ち出して感謝を請うのも何だか器が小さい気がしたからだ。

支払いをすませて入り口でしばらくウロウロしていると、よんが

先刻とは打って変わってスッキリとした表情で現れた。眼鏡を正しい位置にかけ、マフラーを巻き、髪も結びなおしたらしい。僅かに前髪が濡れているのは、顔でも洗ってきたのか。

「よし、行くか」

「オツケー。うん、目も大分覚めた」

「そんなに眠かったんだ」

「だって、家にいたらもう寝てる時間だしさあ」

ドアを開け、よんを先に通しながら、それを聞いてザキは思い出したように尋ねた。

「そういえば、よん家に連絡しなくて大丈夫か？ 心配されてね？」

「え？ 一応母親に電話入れといたよ」

「マジ？ いつ？」

「最初にトイレ休憩した時」

「そっか。全然気付かなかった」

「ザキは？ 『この不良息子！』とか怒られない？」

「俺もさっき自宅の留守電に連絡しといたけど。まあ、俺は結構親から信用されてっからな」

「ふーん、”ゆーとーせー”だ」

「……まあな」

よんが多少からかい気味にそう言うと、意外にもザキから返ってきた反応は鈍かった。これまでのやりとりから、大袈裟な自画自賛の言葉でも飛んでくるのかと思っていたよんはザキの態度に僅かな引っ掛かりを覚える。真剣、というよりはどこか沈鬱ですらあるその表情について、しかしよんはその場で追求することはしなかった。全く心のこもらない、平坦でつまらなそうな店員の「ありがとうございましたあー」の声を背に、二人はファミレスを出る。

「おつ、結構寒い」

一度大きくのびをしたよんが、そう言って空中に大きく息を吐いたが、もちろんそれが白くなるほど寒いはずがない。ファミレスの中は深夜時間帯の節約のためか、暖房は最低限に抑えられていたが、

それでも充分に温かったのだ、と外に出て初めて分かる。

ザキが、入り口にほど近い位置に止めた自転車に歩み寄ろうとすると、自転車のすぐ近くに何かぼんやりとした白い物体を発見した。駐車場には店内からの明かりが投げかけられていたが、明るいところから急に暗いところに出てきたためか、まだ目が慣れずそれが何なのか判然としない。

眼を凝らしながらザキが近づいていくと、そこにいたのは一匹の猫だった。背や顔が茶と黒のまだらで、足とお腹が白い。産まれてそれほど間がないのか、かなり小さかった。二、三ヶ月というところだろうか。

「おっ」

全般的に動物好きのザキは、嬉しそうな笑顔で猫の傍に慎重に歩を進める。しかし、大分人馴れしている猫なのか、ザキがすぐ近くまで来ても猫は逃げ出したりせず、前足をきちんとそろえて座ったままザキを眺めている。

ザキは、猫に向かって手のひらを上にして差し出した。猫は、興味深そうに視線を移動させ、その匂いを嗅ごうとする。それから細かい声で一声鳴いたが、まだ子供のためか「ナア」という若干鼻にかかった鳴き声だ。

「可愛いなあ」

恵比須顔で、ザキはさらに一歩近づき猫の顎をなでた。猫は特に警戒するでもなく、なされるがまま気持ちよさそうに目をつぶる。

「な、可愛いな」

当然何か反応があると思っていたのに、背後から声も気配もしないことに遅まきながら疑問を感じ、ザキはしゃがんだ体勢のまま同意を求めて振り返った。すると、後ろには誰もいない。そのまま視線を滑らせると、五メートルほど離れたファミレスの入り口付近から、よんは一步も動いていないらしかった。

「何やってんだよ」

ザキが呼びかけても、いささか腰の引けた姿勢でその場に硬直し

ている。顔も引きつつて固まったままだ。

微動だにしないよんの様子を目にして数秒後、やっとザキはその原因に思い当たる。

「よん、もしかして猫嫌い？」

白い塊から目を離さず、よんは固い表情で何度もうなずいた。：

…本気で怖がっているらしい。

「何で、大丈夫だよ」

もう一度猫に向き直り、ザキは慣れた手つきで猫の耳元や胸の辺りをなでてやる。それでも、よんはちぎれそうな勢いで首を横に振った。

「ちよつと、抱っこさして」

一応断り、ザキは猫を両手で抱えて抱き上げた。そんなことをされても、猫は体の力を抜いたままいたって大人しく言いなりになっている。

「ホラ」

猫を抱いたままザキがよんに近づこうとすると、よんは一步二歩後ずさった。

「大丈夫だつて」

むしろよんの方が野生の獣に思えてきて、ザキは自分の言葉を証明するように腕の中の猫をもう一度なでた。ザキの胸に手を置き、落ち着いた姿勢の猫は今にも喉を鳴らしそうに目を細める。

その様子をしばらく見守り、よんはようやく恐る恐るといった呈でザキ向かって歩いてくる。しかし、その顔はまだ半信半疑だ。

動物園の飼育員のデモンストレーションよろしくザキが猫をなで続けていると、よんはすぐ傍まで来てそつと猫を覗き込んだ。

「よんも触ってみ」

ザキが促しても、よんはまだ躊躇っている。

「いきなり暴れたりしないって」

さらにザキが笑いながらダメ押しすると、よんは視線で「本当？」と尋ねてくる。ザキも視線で返し、何度かうなずいて確約してみせ

た。

それを見てようやく決心したのか、よんはこわごわ猫に腕を伸ばした。猫の方は特に恐れる様子も逃げる様子もない。それに力を得よんは指先で猫の頭に触れる。まだ大人になりきらない猫の、ボリユームのない柔らかい毛の感触が伝わってきた。

「な？」

どこか得意げに、ザキはよんに同意を促す。よんも真剣な表情で猫をなでながら、小さくうなずいた。

「抱っこしてみ」

「えっ、ちよっ……こ、無理だよ」

本当は「怖い」という言葉が口をつきそうになり、よんは慌てて言い換える。ザキが猫を差し出そうとすると、よんはそれを押し返しながら後ろに一步下がった。

「大丈夫だよ」

それでも、ザキは自信たつぷりによんに猫を預けようとする。少しの間ためらい、よんはそつと猫を受け取った。おそらくまだ体重三キロにも満たないだろう子猫はひどく軽く、丁寧に扱わなければ碎けてしまいそうな錯覚をよんは覚えた。

ザキが完全に手を離し、よんは猫を胸元に引き寄せる。猫の抱き方など分からなかったが、よんの腕にくると猫は自分で向きを変え、体を丸めようとした。それが、自分の今いる場所が安全だと確信したための動作だと、よんにも何となく分かった。

「大丈夫だろ？」

にんまりとした笑顔でザキは確認をとる。猫の可愛さに見とれていたよんは、その言葉にいいかげんにうなずいた。

「意外だよな、よんが猫嫌いだったなんて」

「他の動物は大丈夫なんだけど、猫だけはね」

「何で？ 何かあった？」

「小さい頃、おばあちゃんの家で飼ってた猫を触ってたら、すごい暴れてひっかいて噛み付かれて、それ以来ずっとダメ」

「あー、子供の頃って手加減知らないし、自分の都合だけで無理矢理触ろうとしたりするからな」

過去を反省するような表情で、よんはその言葉にうなづく。

「ザキは全然大丈夫なんだ？」

「動物はだいたい平気。うち、猫飼ってるし」

「そうなんだ」

「おお。三匹いて三匹ともオスだから、結構普通に暴れるけどな」

「じゃあ、その腕の傷って猫の？」

実は前から気になっていた、という口調で、よんはそう言つと顎を使ってザキの腕を示した。

「ああ、そう。……何？ 何だと思ったの？」

「リスカの痕かと思った」

よんは至極真剣にそう口にしたのだが、聞いた瞬間にザキは小さく吹いた。

「なわけねえーよ。だいたい、リスカの痕だったらこんな浅くないだろ」

「……そうだよね……」

笑われても怒り出すでもなく、よんはぼんやりとそれに応じる。

「何？ よんはリスカしたことあんの？」

「あるわけないじゃん」

そこでようやくいつもの調子に戻り、目の奥に強い光を宿してよんが言い返してきた。

「ただ、ザキがリスカするほど悩んでる人なのかと思って」

「あー、ナルホドね。でも、今ントコ死にたくなるような悩みはないよなあ」

それが事実ということもあり、ザキは至って気軽にそれに答える。もしかして、よんは今俺のこと心配してくれたのかな、とちらりと思いつながら。

「さて、じゃあそろそろ行くぞ」

いつまでもファミレスの駐車場で喋っているわけにはいかない、

とザキは出発を宣言した。とりあえず国道129号線の終着点まで行けば海にたどり着くだろうが、今いる地点からだあと二時間はほしいところだ。荷台によんが乗っていたとはいえ、ここに来るまでに、時速十五〜二十キロは出していたはずだ。しかし、疲労の蓄積もあり、今後も同じだけのスピードがだせるかどうかは分からない。

「えゝ、もおうゝ?」

ザキに告げられ、よんは力いっぱい渋ってみせる。

「いつまでも駐車場にいてもしょうがないじゃん」

「じゃあ、このコ連れてつていい?」

子猫を抱いたまま、よんは首をかしげて尋ねた。ついさっきまであれほど怖がつていたのはどこへやら、すっかり気に入ってしまったらしい。子猫の方も、よんの胸の中が温かいのか、うつらうつらと眠りかけている。

「ダメだよ」

しかし、ザキは一蹴する。

「えゝ、何でえ?」

「連れていけるわけないだろ」

「せっかく慣れたし……すごく可愛いのに……」

「ダメ。許可できません」

「だって、このコ野良かもよ?」

首輪がついていないのでその可能性は高い。

「ファミレスの駐車場にいるんだし、店員が飼ってるんじゃない?」

何か余り物とかもらってんだよ」

「置いてって死んじやったりしない?」

「人馴れしてるし、大丈夫だろ」

そこで、よんはザキを下から覗き込み、大きく目を見張るとつんと口をとがらせながら首を微かに傾け、もう一度甘えるように懇願した。

「ホントに、ダメ?」

そのよんの可愛さに思わずうなずきそうになり、ザキは精一杯の自制を利かせて否定する。

「ダメ」

あらかじめ予想していたらしく、よんは頬をふくらませるとしづしづ子猫を駐車場の上に下ろした。子猫は抵抗することなく、その場にちよこんと腰を下ろす。

「今度、あたしが漕ぐよ」

ザキが自転車の開錠をしていると、後ろからよんが提案した。

「え、マジで？」

「うん。そんなに長いこと漕げないと思うけど」

「全然いいよ。助かるわ。ちよつと足だるかったし」

「三十分くらいかもよ？」

「充分でしょ」

後ろで寝られて自転車から落ちるよりマシだよ。

そう付け加えようとして、ザキは言葉を飲み込んだ。よんの不興を買って千載一遇（？）のチャンスを逃す手はない。多少おだて気味に言うと、よんはニツコリと笑った。

スクールバックをザキに渡し、よんは勢いよく自転車のフレームをまたぐ。スカートが翻り、中が見えるのではないと焦ってザキは慌てて目をそらせた。

よんはそのままザキが荷台に座るのを待っている。ザキは自分のナツプザックを背負い、よんのスクールバックを前に抱えると、進行方向を向いて座り、荷台の枠を掴んだ。肩越しにそれを見ていたよんは、何故か軽く失笑する。

「そこでいいの？」

「え？」

「掴むとこ。腰に掴まってくれても全然いいのに」

この数時間で密着されるのには慣れたが、密着するのには抵抗がある。それを見透かしたかのようなよんの言葉に、ザキはしばし沈黙した。よんは、「小悪魔的」という表現がぴったりの笑みを浮か

べている。

「いいよ、ここで」

「落ちないでね」

ぶつきらぼうにザキが答えると、すかさずよんは忠告した。

「じゃあね、猫ちゃん」

それから、二人のやりとりを少し離れたところで見守っていた子猫に、名残惜しそうに手を振る。

よんがペダルを漕ぎ出すのに合わせて、ザキは地面を蹴った。重心は後ろに偏っているはずだが、自転車は思ったよりスムーズに走り出す。

子猫はその場に座ったまま二人を見送り、やがて銀色の車体が夜の闇の中へ消えていくのを見届けると、おもむろに立ち上がり踵を返して歩き出した。

第六話 お嬢様は夜行性

子猫はその場に座ったまま二人を見送り、やがて銀色の車体が夜の闇の中へ消えていくのを見届けると、おもむろに立ち上がり踵を返して歩き出した。そのまま駐車場をファミレスの建物の方へと歩いていくと、裏手から扉の開く音が聞こえてくる。子猫が足を速め、建物の裏へ続く角を曲がると、すぐ手前の従業員出入り口の防犯灯がつき、ドアが半分ほど開いていた。中からサーモンピンクのワンピースに白いエプロンという制服姿の二十代の女性がプラスチックの皿を手に顔を出して辺りを見回している。そして、子猫がテクテクと自分に向かって歩いてくるのを発見すると、嬉しそうに笑った。「ミー子、ご飯だよー」

子猫の前に差し出された皿には炒り卵やハムや鶏の唐揚げなどが盛られている。皿の底が完全に地面につく前に、子猫——ミー子は早くもハグハグと食べ始めていた。ポニーテールの女性は自分のシフトが入っている時はいつも客の残り物や余った食材などを取っておいてミー子に与えていた。何時と決まっているわけではないが、大抵夜遅いこの時間、従業員出入り口の開く音が聞こえればすぐに飛んでいける位置にミー子は待機していることに決めている。

女性はその場にしゃがんでしばらくそんなミー子を眺めていたが、やがて何か思いだしたように店内へと戻っていく。ミー子は大して飢えているようにも見えなかったが、これを食べたらいっつ次があるか分からない、と言わんばかりに脇目もふらずにがつついていた。

少しして再び女性がドアを開ける頃には、ミー子の食事はあらた終わっていた。それを見て再び目を細め、女性は発泡スチロールのトレーに入った牛乳をミー子の前に差し出す。すぐにそれに気づき、ミー子は早速小さな舌でピチャピチャと牛乳をなめ始めた。

休憩時間の途中なのか、女性はトレーを置いただけでまた足早に

店内へと戻っていった。

牛乳を飲み終わり、皿もトレーもきれいに舐めつくすと、ミー子はその場に座って自分の前足で顔を洗うような動作を始めた。一頻り熱心に、足を舐めては顔を拭い舐めては拭いを繰り返していたが、突然我に返ったように動きを止め、まだ何か出てこないかと従業員用のドアをジツと見つめる。しかし、ドアの向こうにもう何の気配もしないことを確かめると、ミー子はくると体の向きを変え、いまだ周囲を照らしている防犯灯の明かりの中から、駐車場を覆う闇の中へと足を踏み出す。

食事の余韻を楽しむかのように口の周りをペロペロと舐めながら歩き、ミー子は駐車場を突っ切るとファミレスの敷地と隣接する民家を隔てるフェンスと石垣の間をすりりと潜り抜け、民家の花壇の土の上に降り立った。そして、一本の椿を指してふかふかする土の上を渡っていく。椿の下はミー子のトイレスポットだ。民家の住民は猫よけの水入りペットボトルや両目の部分にビー玉のついた猫の形をした看板など、ありとあらゆる手でミー子やその他の猫を庭から追い出しにかかっているらしいのだが、ミー子はそんなものには全く興味がないかのように、いつも通りに椿の下に屈みこんで用を足す。この住宅地の中で、彼女にとっては何といっても掘り起こされたふかふかの土ほどトイレに適している場所はない。

用を足したあとに前足で丁寧に土を被せ、一度ブルツと手を振って付いた土を落とすと、ミー子は今度は隣の家へと続くフェンスと石垣の間をくぐり、隣家の建物のすぐ脇へと出る。そのまま石垣と建物の間のごく狭い通路を抜けてミー子は表玄関の方へと足を向けた。

ところが、砂利の敷かれた前庭を微かな音をたてながら快調に進んでいたミー子の足がハタと止まった。そして、体勢を低くすると人々が寝静まり静寂だけが辺りを支配する夜の中に耳をそばだてるようにジツとうずくまる。やがて表通りの方から一台のバイクの音が聞こえたかと思うと、ミー子のいる住宅街の細道へと近づいてき

た。道の向こうでエンジンをふかしたままバイクの停車する気配がし、ガサガサと何かがどこから取り出され、金属の扉の開く音が響いた後またすぐにそれが閉まる音がして再びバイクが動き出す。

そうして、バイクは何度か同じ工程を繰り返したあと、ミー子の目の前の道に止まり、ビニールの上着を着た若い男性が銀色のポストに何か分厚い紙の束を乱暴に突っ込むと、もう途中で停車することなく走り去っていった。バイクの音が道の先を曲がって十分に遠ざかるのを確認すると、ミー子はそろりと歩き出す。一車線だけの狭い道を素早く横切り、ミー子は向かいの家のカースペースに入り込み、そこに駐車されていた赤い軽自動車のボンネットの上にあざやかに飛び乗るとその勢いを利用して車のトッブルーフへ、さらにカースペースの隣の石塀へと飛び移った。そして、幅十センチたらずの石塀の上をいささか満足げに軽快な足取りで進み始めた。

しかし、いくらかもいかないうちに、その家の裏庭に何かを見つけたのか、ふと立ち止まった。雑草がちらほらと顔を見せているその庭の中ほどに目を凝らし、ミー子は息を詰めるように動きを止めると、一六〇センチほどの高さの石塀からひらりと体重を感じさせずに飛び降りた。そして、草を小さく踏み鳴らして走り、上体を起こすと後ろ足で伸び上がり、空中に低く舞う。どうやら蛾が何かを見つけたらしい。ミー子は少しの間夢中になって蛾を追いかけて辺りを飛び跳ね、捕まえ損ねては両方の肉球を打ち鳴らすような仕草を続けていた。するとまた、急にピタリと座り込み、耳だけを動かして周囲を観察する。すぐに何かを察したらしく、今度はまもなく歩き始めた。ミー子が向かったのは、石塀とは庭をはさんで反対側にある金木犀の生垣だ。その下をすり抜け舗装されていない私道に出ると、ミー子の目の前に大きな猫がいた。灰色のしっぽの長い猫で、ミー子の三倍はありそうだ。太っているというのではなく、相対的に全てが大きい。鈴付きの首輪をしているからどこかの飼い猫なのは間違いない。ミー子はその灰色猫にも臆する様子はなく、トットットと近づいていくと、鼻先を擦り合わせて挨拶を交わした。そ

れから、二匹は前後になり私道を奥に向かって歩き出す。奥には二軒ほど家があり、それを過ぎると表通りに面した私設の駐車場へと出る。二匹がその駐車場に着いた頃には、乗用車が六台ほど駐車可能なその平地に数匹の猫がいた。いずれもこの近辺の飼い猫か付近を根城にしている野良だ。キジトラや黒猫、長毛種の洋猫や三毛など種類もさまざまで、雌雄入り混じっているがみな特に縄張りを主張し合う様子はない。ある猫はだらしなく寝そべり、ある猫は毛づくろいに余念がなく、ある猫は仲良く寄り添い行儀よく座っている。そののんびりとした雰囲気、ミー子は今夜の猫会議には何の議題もないと判断したのだろうか、立ち止まった灰色猫を置いて、自分はそのままスタスタとその場を離れた。

駐車場のさらに奥には、数件の貸家が並んでいた。木造の平屋建てで、いずれも大した広さはない。建てられてからかなりの年数がたっていると思われる、板壁はところどころめくれ上がっている。どの家も雨戸が閉まり、どの窓からも明かりは漏れておらず、一見すると人が住んでいるのかもあやしい感じた。

しかし、ミー子は勝手知ったようにそれらの家々の間を通り、駐車場からは最も離れた一軒の前まで来ると、ほんの申し訳程度に作られている、風雨にさらされ半ば朽ちかけた縁側の上に自分の身を踊らせた。

そして、後ろ足で背伸びをすると木製の雨戸に爪をたてる。家の中にいる者に呼びかけるような、カリカリという小さな音が周囲に響いた。

第七話 戌夜の浅き眠り

家の中にいる者に呼びかけるような、カリカリという小さな音が周囲に響いた時には、文江はもう目を覚ましていた。最近四時前には自然と目が覚めてしまう。床に入るのも早いのだが、昨日は風が強くて夜遅くまで雨戸をガタガタと揺らし、うるさくてなかなか寝付けなかった。そんなに早く起き出してもやることがないので、しばらく布団の中でジツとしているのだが、特に考えることがあるわけでもない。木目の浮き出た、カビの目立つ薄い天井板をただ眺めているだけだ。

今年六十七になる文江だが、耳も目もまだ衰えてはいない。子猫が縁側に乗る音もちゃんと聞こえていた。今日も来てくれたんだと思いい、少し嬉しくなったが、懸命に爪をとぐ音が聞きたくてすぐに布団を出なかった。

「ミーちゃん、お帰り」

予想通りの音が聞こえてくると、文江はもつたりと体を起こし、布団をはいで引き戸の傍に寄り、声をかけながら窓と戸板を開いた。狭い縁側には、体重は三キロもないだろうお腹が白で、背中が黒や茶のまだらの小さな猫が、前足をきちんとそろえて行儀よく座っている。文江が声をかけると、一言まだ幼い泣き声を上げて当たり前のように部屋の中に入ってきた。そして、わき目もふらずに文江が寝ていた、ぬくもりの充分に残る布団の上に丸まりそのまま寝てしまう。そんな子猫の様子を文江は微笑ましく眺めていたが、開けた窓から流れ込んでくる三月中旬の払暁の空気はいまだ冷たく、昨日の名残の風が文江を取り巻く。体が急速に冷えてくるのを感じ、文江は慌てて雨戸を閉めなおし、窓にも鍵をかけた。

それから、さて、どうしよう、と思う。布団は子猫に占領されてしまったし、かといって着替えて一日の活動を始めるにはいくらな

んでもまだ早い。仕方なくいつも通りお茶を飲むことにし、文江は布団の上にかけてあった紺色のカーディガンを羽織り、膝に手を置いて立ち上がると今寝ていた畳敷きの居間に続く台所へと歩いていった。

薬缶に水を入れ火にかけてから文江は我知らずため息をもらした。家と同じく台所も大して広くはないのだが、その調理台の上には皿やら調味料やら食材の残りやらその他雑多なものが所狭しと置かれている。一人暮らしだというのに前に住んでいた実家から持ち込んだ四人がけのダイニングテーブルの上にも、スーパーのビニール袋や開封されていない郵便物やティッシュケースなどが散乱していて、結局利用可能なスペースはたったの一人分だ。

文江は両親が亡くなるまでは市内の別の場所にある実家で暮らしていた。両親とも大正の生まれで、父親は戦後会社勤めのサラリーマンとなり、母親は専業主婦だったが、一人っ子の文江は何不自由なく育ち、女学校を卒業すると市内の運送会社の事務員として働いた。そろそろ五十に届こうかという年齢の時、父親が病気で倒れその看護のために三十年以上勤めた会社をやめた。結婚していない文江は当然女性事務員の中で一番の古株だったが、とりたてて重宝されていたわけではない。仕事の手順や古いお得意さんや社内のお品物の管理については意見を求められることも多かったが、事業が手広くなり新規顧客が増え、パソコンなどが導入されるようになって文江の居場所は急速に狭められた。そんな文江に対する若い女性社員の見下すような視線や面と向かって退職依頼のできない中年の管理職連中の遠まわしな肩たたきを受け、父親の看護を理由に文江は会社を去ったのだ。景気がよかったこともあり会社側もこれ幸いと、退職金を少々はずつてくれた。元来文江は執着の薄い方だ。女学校の卒業だったため若い頃に男性と交際することもなく、周囲の同窓生たちが次々に家庭におさまっていくのを目にしても特に焦りも覚えなかった。温和な両親も一人娘を甘やかし、あえて家から出そうとしたり見合い話を持つてくることもなかったのだ、結局今の

歳まで文江はずるずると独り身が続けていた。

会社をやめて五年後に父親が病没すると、次に文江は母親の介護に迫られた。父親が亡くなつてからめつきり歳を取った母親は痴呆の傾向も見せており、ヘルパーを雇うよりはと文江は一人で自宅介護を続けた。文江自身は父親が亡くなつて初めて知つたのだが、文江の実家の建てられた土地は実は借地で、戦中に父親が近所の地主から借りたものだったらしい。借主の死亡により一部所有権が相続人に移るものの、本来は立ち退かなければならないところだったが、痴呆の母親と未婚の中年の娘に同情した地主の孫の温情によつてどうにか住み続けることができた。しかし、その母親も六年前に亡くなり、自分一人で住むには広すぎる二階建ての実家から引越すことに文江は決めた。地主の孫は借地のことなら気にしなくていいと言つてくれたのだが、文江には特に相続すべき財産も跡継ぎもいなかった。長年住み慣れた実家を放棄することに何のためらいもなかった。

自分が働いていた頃の貯金や両親の保険金や相続した銀行預金も含めると葬式を出した後でもそこそまとまった金が文江の手に残り中古マンションの一室くらいは買えたのかもしれないが、慣れない集合住宅よりは、文江はボロくても平屋の貸家を選んだ。

文江が住む駐車場の奥にある六棟の貸家には、入居当初は他に二組の居住者がいたのだが、うち一組の幼い子供のいる若夫婦はすぐに引越してしまい、今は旦那に先立たれた杉原という文江より少し若い女性が一人で住んでいるだけだ。彼女には子供がいて他の街で暮らしているらしいが、たまに孫を連れて遊びに来る姿を見かける。一緒に住まないかと勧められているようだが、体も元気だし、お嫁さんに気を遣わせるよりは、と申し出を断つたのだという。

人付き合いの苦手な文江がこれだけのことを知っているのは、杉原さんが回覧板などを持つてくるたびに短い間立ち話をしていくからだ。といつても話しているのはもっぱら杉原さんの方で、文江は「はあ」とか「へえ」と相槌を打つことしかできない。

お湯はすぐに沸き、文江は急須にいつもスーパーで買っているグラム一円ほどの茶葉を入れ、お湯を注いでしばらく蒸らす。茶渋で汚れた灰色の急須も茶色いゴツゴツとした湯呑みも、実家から持ってきたものだ。一人暮らしには不要な大部分のものを捨てたが、台所用品はほとんどそのまま運び入れた。新しいものを買うのがもったいなかったのはもちろん、いろいろと愛着があつて何が不要かが選択できなかったのだ。そのため食器棚やテーブルの上にまで物が溢れ返る結果になってしまう。

これじゃ、今はやりの「ゴミ屋敷」の住人みたいね。

文江は台所を見回して小さく溜め息をついた。シンクもここ数年大掃除すらしていないため、水垢がこびりついたままだ。もっとも、他の部屋は逆に物が少なく寂しいくらいにすっきりと片付いている。洋服ダンスも一棹のみ。あとは布団と冬にはこたつにもなる座卓とテレビくらいで大型家具や幅をとるような置物のたぐいは一切ない。文江は物持ちがいいのでそれほど多くのものを必要としなかった。今着ている薄ピンクのパジャマも、もう買ってから十五年以上たつ生地はよれよれで色も褪せ白に近くなっているほどだったが、ここが破れているわけでもなく、誰かに見せるわけでもないのになかなか捨てる決心がつかないでいた。

湯のみにお茶を注ぎ、文江は台所のテーブルに座った。真冬ほどではないが、やはり膝が少し痛い。これまで大した病気もなく生きてきたが、体の衰えは否応なく忍び寄る。

お茶をすすりながら今日は何かすることあつたつけ、と考えるが、何一つ浮かんでこなかった。買い物は昨日すませたばかりだ。趣味もなく友人もいない文江は、日中ほとんどすることもなく、勧誘の電話だの売り込みの営業マンの来訪を受ける以外は日がな一日テレビを見て過ごしている。テレビを見れば大抵のニュースは分かるし、老眼がひどく字を読むのが億劫なため新聞もとっていない。昔は読書が唯一の趣味だったのに。テレビの中では最近五十代以上の団塊の世代や退職者たちが元気で、仲間同士で音楽を始めたり個展を開

いたり、と活躍する姿が何度も紹介されていたが、あたしは無理だわ、と文江は思う。そもそも人前に出ると物怖じしてしまつて言葉が出てこないし、知らない人が苦手でうるさい場所は嫌いだ。それでも学生時代は何とかなつた。遊びに誘ってくれる同級生もいたし、誘われれば断らなかつた。それは、勤め始めてからもそうだ。だが、その関係が校外や社外にまで発展することはなかつた。今では同窓会のお知らせもこないし、元の会社仲間が飲み会や食事に誘つてくることもない。

若い頃には淡い恋も何度か経験した。しかし、時代のせいとお互いの性格のせい、それは恋愛や結婚という形にまでは成長しなかつた。職場でお局様と陰で笑われ、退職して両親の世話をやつと終えたと思つたら、女だった時代は遙か彼方に過ぎ去つてしまつていた。杉原さんを見ていると時々羨ましいとは思ふけれど、今となつては子供がいればよかったのとか一人で寂しいと思うことすら何だか面倒くさい。

二年前に年金をもらい始めたこともあり、お金には困っていない。仕方なくホームレスになる人や借金で首が回らない人たちに比べればそれだけでも幸運だと言わなければならないだろう。だが、やはり文江はどうしても考えてしまう。自分は何のために生きているんだろう、と。

朝起きて布団を畳んで顔を洗つて着替えて朝食を食べてテレビを見て、昼食を食べて営業マンの相手をしてテレビを見て夕食を食べ、電話に出てテレビを見てお風呂に入つて寝る。それが文江の一日だ。最近近所に映画館が出来たし、バスに乗れば大きなショッピングモールが三軒ほどあるのだが、それらをちょっと見に行つてみようという好奇心も文江にはなかつた。趣味を作ろうという気概もない。そもそも何から始めればいいのか分からない。杉原さんはガーデニングが趣味らしく、以前に一度だけ鉢植えをもらったことがあったが、育て方がよく分からずに枯らしてしまつた。旅行に行つてみようとか、たまにはおいしいものを食べてみようとか、宅配ピザ

をとってみようとか、世の中に数多くのささいな誘惑があることも文江は知っている。しかし、それらどれも実践してみたことがない。一人では勝手が何一つ分からないのだ。ごくまれにほんの気まぐれのように思い立ってパンフレットや広告を手にとって見ることもあるのだが、結局どれがいいんだろう、自分はどこに行って何をしたいんだろうと考え始めるとよく分からなくなってしまう。どれも経験してみたいような気がするし、今まで必要なかったのだからこれからもしやらないのではないかと思ってしまうのだ。

だいたい、おいしいものなんか食べてどうするんだろう。いつも食べている食事だって何のために食べているのか分からないくらいなのに。食事とは普通お腹がすいたからとるものだ。しかし、文江のそれは完全に惰性だった。時間が来たから、食事でもしなければ時間が過ぎていかないし、だから食べる。ただそれだけのことでしかない。

何てもつたないんだろう、と時々感じる。食物をエネルギー変換することもなしに、ただ老廃物として体外に排出する。なんだか糧としてその命を捧げてくれた動物や野菜たちにも申し訳ない。

死んじやおうかな、と思うこともある。

生きててもしょうがないし。

けれど、どうやって死ねばいいのかを考えるのが、また面倒くさい。電車で飛び込んだら後始末が大変だっていうし、運転手さんもそれを目撃してしまった人もトラウマになるだろうし、電車を止めてしまったら賠償しなければいけないとか聞くし。第一、利用者が迷惑する。飛び降り自殺をするとかまに下を歩いている誰かを巻き込んでしまうこともあるらしいし、高い建物から飛び降りたらビルの所有者にも迷惑だろう。かといって自宅で首吊りや薬物中毒自殺をしようものなら、やはり片付ける人がかわいそうだ。テレビでよく見る何でも屋さんみたいな人が時々人が死んだあとの部屋の片付けを依頼されたりするらしいけど、臭いもすごいみたいだし、肉が腐ると畳とかに張り付いてしまうらしい。死に方としてはあまりき

れいじゃない。どっちにしろ自分には縁故がないのだから、死体を処理する人が困ることになる。最悪でもお骨を両親の墓がある檀那寺で引き取ってくれるか、さもなければ無縁仏だ。かといって樹海に分け入ったり崖から飛び降りるなんて方法だと行方不明者ということで文江に繋がる数少ない人間に心配をかけてしまうだろう。杉原さんとか貸家の不動産会社の人とか。家賃は銀行引き落としだからいいとして。

自殺するには、と考えただけで文江の脳裏にはこれだけの思考が錯綜する。何事にも心配症で先のことを考えすぎて行動を起こせないのは、文江の昔からの悪いくせだ。考え続けているとだんだん何もかも面倒くさくなってくる。結局、死ぬにも気力がいるんだ、と文江は思う。その点若い人は羨ましい。後のことを考えず勢いで死ぬるんだから。

積極的に死にたいとは思わないが、生きていなくてもいいのにな、とは思う。だけど、あたしがいなくなったらミーちゃんはとうなるの、と考えて文江は布団の上でスヤスヤと寝息をたてる小さな生き物に目をやった。ミーちゃんとは呼んでいるが、それがその猫の名前かどうかは分からない。女の子であることは確認したが、首輪をしていないからどこかの飼い猫ではないのだろう。一月ほど前にふらりとやってきて、それ以来明け方から昼過ぎまで文江の家で寝ている。ご飯はどこか別の場所でもらっているのか、お腹をすかせている様子はないのだが、それでも文江はミーちゃんのために牛乳やにぼしやキャットフードなどを常備していた。

ミーちゃんが文江の家を自分の住処だと認識しているかどうかは定かではない。おそらく、自分がいなければどこか他の家で飼われるのだろう。どんな猫でもそれは同じだ。猫は人につくのではなく家につくのだとよく言われるではないか。

それでも、文江にとってミーちゃんは死なない言い訳にはなっていない。

あ、そうか。今日は回覧板を回さなければいけないんだ、と文江

は唐突に思い出す。文江が次に回すのは、すぐ隣の二階建てアパートの一部屋だ。何だか偏屈で頑固そうなおじいさんが一人で住んでいて、あまり顔を合わせても楽しい相手ではない。

回覧板は昨日杉原さんから回ってきて、はさんであるお知らせの中にあった町内の催し物に誘われた。確かフラワーアレンジ……何とか。生け花みたいなものだって杉原さんは言っていたけど。町内会館の一室を使い、どこから先生を呼んで本格的な講習会を行うらしい。杉原さんは花に興味があるからいいとしても、文江はチューリップとかタンポポとか桜くらいしか花の名前なんて知らないのに。そう告げると、初心者向けの講習会だからそれでもいいんだと杉原さんに保証された。たまには来てみなさいよ、まだまだ老け込むには早いわよ、と。いつも言われていることだ。もうここ何年も化粧なんてしていないし、髪も染めていないから真っ白で、確かに歳よりは少しふけて見えるかもしれない。

でも、どんな人が来るんだか分からないけど、やっぱりあたしは気の利いた会話なんてできないし。いつもテレビを見ているから、人の話を聞くことならできるけど——そう思ったところで文江の思考がハタと止まった。そうだ、どうしていつも何かうまいことを言わなければならぬかと思ひこんでいるんだろう。あたしと同じ年頃の人間は話を聞いてもらいたいことの方が多いんだろう。杉原さんだってだからいつもこちらが大した返事をしないにも関わらずペラペラと話していくんだし、もしかしたら文江から話しかけたことはないが、隣のアパートのおじいさんだってそうかもしれない。

誰かの話を聞いてあげることなら自分にもできるかもしれない。そう思うと少し気持ちが和らぎ、心が軽くなった気がした。

講習会の申し込みの締め切りはまだ先だって言うし、杉原さんに参加したいって言うてみようか。ああ、でも何か着ていく服はあったかしら。新しい服なんてしばらく買っていないから、お店に行つて適当なのを見繕った方がいいかもしれない。そうそう、お化粧品もしなくちゃ。今はお化粧品も随分変わってきてるのよね。今からア

ンチエイジングは無理かもしれないけど、どんなのを使えばいいのか店員さんに聞いてみようか。

文江の思考は留まるところを知らずに流れていく。と同時に、数十年ぶりに自分がわくわくしていることを知った。

つらつらと考えているうちに、外は白々と明けてきたらしい。それに気づいて文江は立ち上がると、ミーちゃんを起こさないように気をつけながら雨戸を開ける。外気温ははまだ上昇には転じていないようだったが、その冷たい空気がにわかにはのぼせたようになった文江の頬に心地よい。

西の空を見やると建物の間から望める遙か彼方の稜線すれすれに煌々と輝く一つの星の姿があった。西の明け六つ星は街の人々を見守るように三月の黎明の空に静かに瞬いていた。

第八話 小夜過ぎるころ

西の明け六つ星は街の人々を見守るように三月の黎明の空に静かに瞬いていた。

「はい、じゃあみんな用意はいい？」

その街を見渡せる小学校の屋上で、十人以上の子供たちと一人の女性教師により、明け方の天体観測会が開かれていた。女性教師はこの平岡小学校の六年三組の担任である江藤麻衣子、四十一歳、独身。子供たちはつい先日卒業式を迎えたばかりの彼女の受け持ちの生徒で、今日は六年三組最後の天体観測会だ。天体観測は江藤先生の趣味で、担当したクラスの生徒たちが希望すれば休日や長期休暇の際学校側の許可を得て不定期に開催している。望遠鏡は学校の理科室にあったものを借り、双眼鏡を持っている生徒はそれで月面観察をすることもある。

いつもは子供たちが寝る前の時間、八時や九時頃の観測が多いのだが、今日は最後ということで、初めて明け方の観測会が開かれた。その分参加人数も少なく、中にはいまだ半分寝ぼけ眼の子供もいる。しかし、卒業後にクラスの仲間にもた会えるということと、いつもなら顔を合わせるはずのない時間帯に学校にいるという特殊状況も手伝い、大半の生徒が興奮気味にはしゃいでいた。

「寒い人いたら先生カイロ持つてるから言ってねー。あと、あったかい飲み物も持ってきたから。でも、トイレ行きたかったら自分で行くんだよー。その時は廊下暗いから足元に気をつけてねー」

つつき合いふざけ合い口々におしゃべりをやめない生徒たちに、江藤先生はいささか声を張り上げて注意を促す。聞いているのか聞いていないのか、一応そこからは「はい」という声が飛んできた。先生もそうだが、みんな暖かそうなズボンにダウンのジャケットやフリースという防寒姿だ。体温が高いためか、子供たちが口を

開くたびに白い息が出る。昨日一日強く吹き荒れた風は、夜中には一旦収まっていたが、東の空から薄明が忍び寄るこの時刻、風は再び強まる気配を見せ始めていた。

「じゃあ、西の方の空見てー。あそこにすつごく明るく光ってるのが、金星だよ、みんな知ってた？」

「せんせー、西ってどっち？」

「海のある方が南だから、海に向かって右手の方が西だよ」

「せんせー、道路がよく見えまーす」

江藤先生が家並みの向こうに広がる海をみんなに指し示していると、双眼鏡を地面に向けていた一人の男子生徒がすかさず報告した。「こらー、大輝くん、見るのは空でしょー？」

「大輝、覗きすんなよ」

隣にいた友人に冷やかされ、大輝はムキになって反論する。

「覗きなんてやってねえーよ。だって、先生、高校生か中学生のアベックが自転車を通ってったんだよ」

「アベックなんて言葉よく知ってるわね」

今時の十二歳の子供が口にする言葉ではない気がして、江藤先生は笑いながら言った。しかし、すぐにそういえばこの子の家はお父さんが早くに亡くなってお祖父さんが父親代わりを務めているんだと思い出す。そのせいで言葉使いが少し古いのだろう。

そんな先生や仲間たちのやりとりを尻目に、健一は二台ある望遠鏡の一つに近寄ると、西の空に向けた。みんな騒ぐのに夢中で誰もまともに天体観測などしようという意志はないらしい。授業とは違うのだから当然といえば当然なのだが、毎回欠かさず出席している健一は、手馴れた様子で望遠鏡を操作しレンズの中心に金星を合わせた。

「よく見える？」

健一が金星に焦点を合わせて間もなく、すぐ近くでそんな声が聞こえてくる。健一が顔を上げるとそこにいたのは美奈子だった。あ

と少しで肩に届きそうなおかつぱ。ピンクのダウンに今日来た女子の中では一人だけスカートを履き、足には厚手の白いタイツ。顔立ちはふつくらとしていて、いつも何かに驚いているようなどنگり眼が一番に人目を引く。

そこにいるのが美奈子だと分かったとたん、健一の心臓が急にドキドキと音をたてた。

「健一くんもいつも来てるよね、観測会」

何と声をかければいいのか健一が考えあぐねていると、美奈子はニツコリ笑って言った。とっさに返す言葉の見つからない健一は、視線を落とすとうなずいてそれに答える。

「星見るの好き？」

「……好きだけど……」

観測会そのものは嫌いじゃない。宇宙にも憧れる。それでも、健一がこれまでの観測会を一度も休まず、今日もこんなに朝早く起きてまで参加したのは何も星空観察だけが目的なのではなかった。

「美奈子も好きだろ？ いつも来てるじゃん」

少々ぶっきらぼうに健一が返すと、美奈子は嬉しそうにうなずいた。

「健一くん、中学行ったら部活どうするの？」

平岡小学校を卒業した生徒は大半が地元の中学校に進学する。小学校の卒業生は市内に三校ある中学へそれぞれ振り分けられる。健一たちが進学する第一中学校の来年度の新入生は、平岡小学校他二校の卒業生たちだ。

「俺は……野球部に入るけど」

「そっか……健一くんリトルリーグやってるんだもんね」

質問に健一が素直に答えると、美奈子の表情が曇り、声が小さくなった。自分の答えが失敗だったことを悟り、健一は慌てて聞き返す。

「美奈子は？ 何部に入るか決めてんの？」

「あたしは天文部に入るつもりなんだ」

「天文部なんてあんの？」

「うん。何年か前の江藤先生の生徒が作ったんだって」

健一にとってそれは初耳だった。美奈子には二つ年上の姉が中学校にいるから、その辺りで情報を得たのだろう。

「でもね、毎年そんなに新しい部員が入らなくて、もしかしたらなくなっちゃうかもしれないの」

「他の奴も誘えばいいじゃん」

「なっちゃんとかハルちゃんにも声かけたんだけど、違うことやりたいんだって。もう中学生だし、みんないろいろ考えてるんだよね……」

そこで美奈子は急に大人びた言い方をして溜め息を吐いた。

「だから、健一くん一緒に入部してくれたら嬉しいなあって思ったんだけど……」

そのために自分が誘われたのだと健一はようやく合点がいく。美奈子がうつむいてしょんぼりと肩を落とすと、健一の心はにわかに騒いだ。

「あつ、お、俺も入ってやってもいいけど？」

彼女の落胆を何とかしてやりたくて、思わずそんな言葉が口をついて出てしまう。案の定それを聞いた瞬間、美奈子の顔が輝いた。

「ほんと？」

「だって、天体観測って普通夜だろ？ 中学は兼部もOKだって誰か言ってたし、野球部と天文部なら掛け持ちできるんじゃないか？」

「うん、天体観測は土日の夜とか、夏休みとかの間にやるんだって。だから、いつもの部活の時間は星の動きとか名前とか、天文学の勉強するみたいなの」

「じゃあ、俺天体観測の時だけ出席するとかさ。それもアリだろ？」

「多分大丈夫」

健一の提案に美奈子は心の底からの笑顔を浮かべた。その表情に、自分の選択が正しかったことを知った健一は、少し肩の荷が下りる。「中学校に行ってもよろしくね」

満面の笑顔で美奈子が右手を差し出した。後ろではしゃぎ続ける誰かが気づいて冷やかさないうちに、健一はその少し汗ばんだ手を握り、はにかんでみせる。

「こっちこそ……よろしく」

二人の頭上に広がる青鈍色の空は、東天の裾から徐々に明るさを増してきた。橙から赤、赤紫、紫、群青、瑠璃、紺——天空に織り成す色彩のグラデーション。その雲ひとつない暁の空はまるで天を覆う大きな虹のようにも見えた。

最終話 夜明けのあとで

その雲ひとつない暁の空はまるで天を覆う大きな虹のようにも見えた。

あたしたちが海岸に着いたのは、そんな風に空がそろそろ白み始める頃だった。

「うわー、つつかれたー！」

海岸沿いを走る道路のガードレールにもたせかけるように自転車を止めると、ザキは砂浜に走って行ってそう大声を上げながら洋服が砂で汚れるのも構わずに仰向けになる。

「はい、お疲れ」

あたしはザキのそばまでゆっくり歩いて行くとすぐ近くの自動販売機で買った缶コーヒーを手渡した。とりあえず、ねぎらいの言葉を口にしながら。

「お、サンキュ」

嬉しそうに受け取ってザキは早速ブルトップを開けて口をつける。味に関しては何も言わない。一応微糖を買ってみたんだけど。文句言われても困るけどね。あたしのおごりだし。

猫舌のあたしは缶をハンカチで包んで、蓋を開けたものの熱くて少し冷まさないとい飲めない。制服が汚れるのは厭だったけど、立っているのも具合が悪くてあたしはザキの隣に腰を下ろした。ついでにローファーと靴下を脱ぐ。海沿いの朝の空気はまだ冷んやりしてる。でもやっぱ海来たら裸足でしょ。ザキに借りたマフラーは首に巻いたままだったから、上半身と下半身の服装がかなりアンバランスなことになってる。

まだ日は登っていないけど辺りは大分明るい。そろそろ五時すぎになるのかな。海岸の遠くの方に犬の散歩をしている人や海岸沿いの道路をジョギングしている人も見かけるけど、それ以外には車も

走らず周囲は静かで波の音だけが繰り返し繰り返し耳に届く。風がまた少し吹き始めたけど、明け方の海はひどく穏やかで、その潮騒を聞いているとだんだんと眠くなってしまうそうだ。

「いやー、本当に来ちゃったね」

白い波頭を見つめながらあたしが話しかけると隣でザキが苦笑したのが分かった。

「来たといって言ったのはよんだろ。しかも、自転車漕いでたのはほんとに俺だし。おかげで足パンパンだよ」

ごもつとも。だから、ありがとって意味も暗に込めてんじゃん。

なんて、そんなあたしの心が通じるわけもないので、あたしは答える代わりにまだ熱いコーヒーを一口すすった。

「海来たの久しぶりだなあ」

「あたしも。でも、もつとサーファーとかいるかと思ったけど、意外に人気がないね」

「サーファーは江ノ島とか稲村ヶ崎の方なんじゃね？ それか、今日はたまたまいないとか」

「そっか」

まあ、別にどうだっていいんだけど。

話がそこで途切れると妙な沈黙が辺りを支配した。ザキはさすがに疲れたのか、少し口が重いようで、あたしは自転車の荷台に乗りながらずつと尋ねてみたかったことを口にしようかしまいか少しの間迷っていた。

「あのさ」

「ん？」

やっぱり聞いてみることにする。答えたくなかったらザキも答えないだろうし。

「一つ聞きたいんだけど」

「何？」

「……ザキ、何で万引きなんかしたの？」

面と向かって尋ねるにはやっぱりちよつとためらいがあった。ザ

キを咎めたいわけじゃない。ただ不思議に思ったから。一晩ずっと一緒にいて、ザキが面白いからとか虚栄心を満足させるためだけに万引きなんかするように思えなかった。だって、こんなあたしにまともに応対してくれる男子の方が珍しいし。

あたしの質問にザキは長いこと答えなかった。やっぱり答えなくなかったのかな、と思ってザキの方に目をやると、ザキは自分の足元の砂を見つめたまま何か考えこんでいる。

「あ、別に答えなくなかったらいいんだけど」

このままだと話が進まないような気がして、あたしはとりあえずそう謙虚に水を向けてみた。それでもザキはまだしばらくの間沈黙していたけど、あたしの言葉がからかいでなかったことも分かったんだろう、少々自信なさげな声が聞こえてきた。

「うーん、何でだろ。俺にもよく分かんないんだよな」

「衝動的にやっただってこと？」

「……多分」

「常習じゃないんでしょ？」

「正真正銘昨日が初めてだよ」

あたしは精神分析が得意なわけではないけれど、万引き犯って大抵何か問題を抱えてるらしい。孤独とか悩みとか。ザキもそうなのかなって思っただけ……。

会話はまたしばしの中断を迎えた。どうやらザキはあたしの質問に真剣に答えようとしてくれてるらしい。なので、あたしも大人しく彼の言葉が始まるのを待った。

「何かさ、俺ここしばらくずっとイライラしてたんだ」

「何で？ 大学受かったって言ってなかった？ 受験のストレスはもうないんでしょ？」

「そうだけど……受験のあとからかなあ……違うか。受験よりずっと前から何かずっともやもやしてたんだ」

「何が？」

ってあたしが聞いてすぐに答えが返ってくるようなら、ザキも何

一つ困ることはないんだろう。

「分かんね」

ザキは正直に首を振った。そんな様子を見ていとあたしにまでもやもやが移ってしまいそうだ。そこで、一つ一つ思いつく限り解決していくことにする。

「大学は、行きたい大学にストレートで合格したんでしょ？」

「うん」

「高校の友人関係で何か悩みを抱えてるとか？」

「特にないよなあ。俺が知らないところで恨みとか買ってることはあるかもしれないけど。今の友達はみんないい奴ばっかだし」

「じゃ、家族に進学について何か言われた？」

「いや。家族はむしろ喜んでくれたし、俺んちみんな仲いいから諍いとかも別にないし」

「じゃ、最近彼女にふられた」

「彼女いないから」

大学にストレートで合格する息子、仲のいい家族。友人関係にもトラブルはない。単純かもしれないけど、あたしは何かザキのモヤモヤとイライラの原因がそこにあるんじゃないかって気がした。親の前ではいい子でいなきやいけない自分とか？ そういえばさつきファミレスでザキのこと「優等生」ってからかったら、何か反応が微妙だった。じゃあ、もしかして万引きは「遅れてきた反抗期」？

……それじゃああまりにも短絡的すぎるかな。

「じゃあ何……？ 不安とか不満なんてザキなさそうじゃん。成績も悪くなさそうだけど？」

「悪くはないな。人にどこまで自慢できるかは分かんないけど」

「そこまで聞くとこの先前途洋々な気がするんですけど？」

「将来に対するただぼんやりとした不安」が自殺の原因だったのは芥川龍之介だったつけ。思春期にはそんな風を感じる子供もいるらしいけど、ザキは年齢的に思春期は過ぎてるし。

「前途洋洋かあ……」

そこで、ザキはポツリとつぶやいた。あら、もしかしてそれがキーワード？

「前途洋々ってどういうこと？」

「だから、いいかどうか分かんないけど、とにかく四年制大学を出て、まあ、そこそこの会社に就職して、生活に困らないだけの給料もらって一生食いつぶぐれないってことなんじゃないの？」

少なくとも今の世の中では、それだけですごく恵まれてると思うけど。

ところが、あたしの言葉にザキはまた黙り込んでしまった。

「何か違うこと言った？」

間違っではないと思うんだけどな。自分の考えを押し付ける気はないけど。

ザキはあたしの言葉を反芻するかのようにまだ長いこと沈黙を保ったままだった。

「それって幸せなのかな？」

そして、ややあつて再び小さく尋ねる。あたしは意味が理解できなくて思わず聞き返した。

「幸せじゃないの？」

どう考えてもその状態が不幸とは言えないと思うけど。

「……いや……じゃあ、何ていうか……」

ザキは歯切れが悪い。自分の気持ちにぴったりと合う言葉が探し出せないのかもしれない。

「そこにさあ、『俺』っているのかな」

「え？」

意味が分かんない。「人間は考える葦である」っていうくらいだから、自分が「自分だ」って意識を持っていればそこに自分はあるってことなんじゃないの。

だけど、ザキが言いたかったのはそういうことじゃなかったみたいだ。

「なんていうか……。安定した生活って大事なんだろうし、失敗が

ないっていいことなんだろうけどさ、そこにアイデンティティっていうか、『これは俺じゃなきゃダメだ』みたいなものってあるのかなって」

「俺がいなくても世界は回ってるって？ 社会の歯車の一つになっ
て埋もれて自分を見失いそうってこと？」

「それもあるけど、自分が納得してれば社会の歯車の一つも悪くないだろ？ だけどそれには『これが俺だ』って言えるものが必要だ
と思うんだよな」

「ザキにはそれが無いの？」

「……ない。少なくとも、今の段階では」

見失うべき自分もないってことか。ザキのもやもやが何なのか何
となく分かってきた。

「ザキ、大学では何勉強するの？」

「学部は情報工学」

「コンピューターとか？」

「そう」

「理系得意だったんだ？」

「別に……。今っぽい役に立ちそうだし、入れたから
なるほどね。」

「でもさ、そんなの大したことないよな。高校でバンドやってる奴
とか、ボランティア活動で表彰されたり運動部でスカウトが来る奴
とか、大学には落ちたけど浪人中せっかくだから外国放浪してくる
とか言っって一人旅に行く奴とか、勉強なんかできなくなっ
てそういう奴らの方が全然すごいじゃん？ それに比べたら俺何やってんだ
ろ、俺には何ができるんだって思うしさ……」

ザキは少し早口で一氣にそう言った。まるで、気持ちを吐き出す
みたいに。

多分、ザキの悩みはいつの時代も多くの若者が抱える普遍的なも
のだ。みんな一度は同じようなことを考えたことがあるかもしれな
い。周囲と自分を比べてその落差に幻滅する。隣の芝生が全部青く

見えてしまう時。「夢」があるのはいいことだ。世間ではそう言われる。夢があるから希望が持てる、夢があるから不幸の中でも人間は生きていける。だから夢を持て。世の中はそう煽る。夢が何なのかそれをどう持てばいいのか、持ったらどうするのか、叶わなかったらどうなるのか。そんなことは誰も教えてくれない。「自分で考えろ、それが若者の役割だ」大人たちはみんなそんな風に言う。だけど、一体そんな大人たちのどれだけが自分の夢を叶えることができたんだろう。自分の得た夢にどれだけの人が満足できたんだろう。そして、一定期間をすぎると、今度は「夢ばかり見るな」と言われる。あれだけ煽っておきながら、「今の若者には夢がない」と嘆きながら、夢があるのは正しいことだと言いながら。「いつまでも夢を見るな、現実を見る、お前たちはもう大人なんだから」と。

—— 本当はどっちなの？

若者たちは戸惑うばかりだ。そして、大半の人間が夢など持つても叶う保証はないじゃないかと思ひ知らされる。ならば夢など持つても、追いかけても無意味なんだと厭でも悟る。

ザキもきつとそういう若者の一人だ。器用だから言われたことは優秀にこなせる。だけど、創造性がない。今までにきつとそれが培われてこなかったんだ。でも、応用の仕方を知らないだけで、少し背中を押してあげれば多分本人が望む方向へ歩き出せるはず。

「ザキは、本名何ていうの？」

あたしがその牽引役になってあげてもいい。そう思ったから、ザキに向き直るとあたしはそれまでの話の流れとは全然関係ない質問を口にした。ザキは当然一瞬呆けて、それから疑問顔のまま答えてくれた。

ほしだきすくゐ
「星崎優だけど？」

「それで、”ザキ”だったんだ」

「よんは？」

「あたしは、よんりーほい」

「は？」

ザキが眉をしかめて聞き返してくる。聞き取れなかったみたい。当たり前か。思い切り正しく発音したし。で、もう一度言い直したけどやっぱりダメだった。

「分かんね。韓国語？」

「惜しい。中国語」

あたしはてつとり早く砂の上に「雍利恵」と書いてみせた。

「何、よんって中国人だったの？」

「半分ね。国籍は日本だけど。だから、日本名は月岡利恵つきおかりえっていうの」

「へえ……」

ザキは戸惑う様子も見せずに生ぬるい相槌を打ったままあたしを見つめた。今時在日中国人くらいじゃ珍しくないか。これでも小学生の時は随分イジメられたし、中学・高校でもかなり興味本位の人間に珍獣並みに扱われた時期もあったんだけど。

「あたしのお祖父ちゃんがこっちに渡ってきたんだって。横浜で中華料理店やってね、その娘のお母さんが日本人のお父さんと結婚したの」

「じゃ、よんはハーフか」

「そう」

あたしがうなずくと、ザキが目の奥で笑ってるのが分かった。何？ ハーフっぽくないとか思ってる？ ハーフの人間に対して何か過剰な期待持ってますん？

「で？ 何で突然そんなこと言い出したんだよ」

「あ、そうそう。それでね。あたしが言いたいのは、あたしの人生とかアイデンティティは生まれた段階で半分くらい決まっちゃってるってこと」

「え？ そうなの？」

「うん。まあ、外国に自分のルーツを持っている人なら一生のうちで一度は考えると思うんだよね、自分の血脈ってヤツ」

日本人だって元を正せば大陸から渡ってきた民族だ、とかいう話

は置いといて。純粹な日本人でも自分のルーツを探りなくなる人はいると思うけど、あたしみたいな境遇の人間は否応なく直面せざるを得ないことも多いんじゃないかな。だって先祖代々日本人ですって人とは明らかに違うわけだし。ましてあたしなんか名前が二つあるわけだし。どうしてみんなと違うのかな、何がみんなと違うのかなって。

「顔は同じで言葉も通じるのに民族が違う、生まれた国が違うって言われてもいまいちピンと来ないしさ。一年に何回か母方の故郷に里帰りするんだけど、あたしには中国と日本の違いがイヤってほど分かって、でもそれを他人に伝えるのが難しくて、かと思えば日本にも中国にも分からないことはたくさんあるんだよね。だから、当然それを知りたいと思うわけ」

「じゃあ、よんは大学行ってそういう勉強しようと思ってるの？」
「うん。日本の大学か中国の大学は知らないけど。てつとり早く研究するにはその方がいいだろうし。あたしはどっちなんだろうって時々思うよ。結局どっちでもあるっていうのが答えなんだろうってさ」

もしくは、どっちにもなりきれない？

「中国の大学って……よん中国語喋れるんだ？」

「ネイティブだよ」

当然でしょう。余裕綽々であたしが答えると、ザキの顔を羨望の表情がチラリとかすめた。

「でもさ、あたしの場合是否応なく決まってるってこと。もちろん、あたしみたいな立場の人間で自分のルーツを研究対象にしない人なんかザラにいるよ？ だけど、一生のうちにはきつとどこかでそれをつきつけられると思うんだ。だったらあたしはとことん向き合ってやろうって思ってる」

楽な方向に逃げたって言われればそれまでかな。でも、どんな学問でも、突き詰めれば自分を知るための道のりなんじゃない？

「そっか……よんはいいなあ……」

ザキの声のトーンが落ちた。ちよつと待つて！ 何か一人で早合点しようとしてない？ あたし別に自分の自慢話したかったわけじゃないんですけど。

「つて、今言つたようなことはあたしのお祖父ちゃんの受け売りだけだね。お祖父ちゃんは今もう亡くなつてゐるんだけど、あたしお祖父ちゃんのことをすごい好きで、小さい頃はしょっちゅうまとわりついてゐるんな話聞かせてもらつてたの。実は、この眼鏡もお祖父ちゃんの形見なんだ。度は入つてないからただの伊達眼鏡なんだけど」あたしが自分の眼鏡をちよつと触りながら説明すると、ザキは大笑いに納得したような表情になつた。……何でだろう、若干むかつく。「お祖父ちゃんがよく言つてたの。夢は幾つになつてもあきらめちゃダメだつて。だつて、お祖父ちゃん三十代の人にも四十代の人にも五十代の人にも『将来の夢は何ですか』つて聞いてたんだよ。夢は見始めた時からが始まりだから、幾つになつても夢見ていいんだつて」

多分、お祖父ちゃんは三十を過ぎてから日本に渡つてそれなりに充実した日々を送れたことを誇りに思つてたんじゃないかと思う。だからそんなことを口にできたんだ。夢が叶つた人間だけが「夢を持って、持つのはいいことだ、諦めなければ夢は叶う」つて言えるのかもしれない。そうだとすると、あたしにとつてはお祖父ちゃんの言葉には真実味があつて、信じたくなる。

「それを考えたらさ、ザキなんてまだまだじゃん？ 今の日本人が八十歳まで生きるとして、あと六十年の間にやりたいことを探せばいいんですよ？ 簡単じゃん」

あたしが言い切ると、ザキはいささか呆氣に取られた表情であたしを見ていた。——あれ？ もしかしてすべつた？

「周りの人が何かすごいことやつてゐるからつて、ザキも今すぐ何かしなきゃいけないってことはないんだつて言いたいのに！ とりあえず目の前にあることから片付けていけばいいじゃん。少なくとも今のトコ人生順風満帆なんだから、余計なこと考える余裕は他の人よ

りあるでしょ？」

あたしの言い方がおかしかったのか、ザキは小さく笑った。届いたのかな、あたしの言葉。

「そっか……」

それから、何かに納得したようにつぶやく。

「大学行つてからも考えられるか」

「そういうこと」

そもそも、どれだけの人がアイデンティティだのパーソナリティだのポリシーだのに深くこだわって生きていけるんだろう。どれだけの人がそれを得ることに気づき、得ようと努力するんだろう。だって、そんなものがなくなったら人間は生きていける。むしろ生きていく上では邪魔かもしれない。そんなことにかかずらっていられない人の方が多いかもしれない。それでも、ザキが今それに気づいてそれを得るための努力を始めるなら、決して遅くはないと思う。

「目の前のことから片付けるか……」

何か思い当たることがあったのか、ザキはそう言つて宙を仰いだ。

「じゃあ、大学行ったら外国語選択は中国語でもとろっかな」

そして、あたしを見てニンマリと笑う。あたしもわざと歯を出して笑った。

「いいよ。あたしが教えてあげるよ」

「すげえ期待してます」

「ただし、授業料高いからね」

「えー、タダじゃないのかよー」

「当たり前じゃん。クリスピークリームのドーナッツで許してあげるから」

「まだそんなこと言つてんのか。あれもうブーム過ぎただろ。立川にもできたじゃん」

「いいの！ あたしまだ一回しか食べてないんだから」

あたしが怒つてみせると、ザキは心の底からの笑顔を浮かべた。それを見てあたしは少し——ほんの少しだけ嬉しくなる。

「じゃ、忘れないうちにケー番とアドレスの交換しとくか」

「よしきた」

ザキとあたしは自分の携帯を取り出して赤外線通信で情報をやりとりした。

「あれ？　よんつて結局どこに住んでるわけ？　あのコンビニにいたんだからあの近くだろ？」

そこで、ザキは唐突に思い出したかのようにそんな疑問を口にした。あたしにしてみれば今さらな質問なんですけど。

「何だ、ザキ気づいてなかったの？」

「何が？」

「あたし多分ザキと家近いよ」

「マジで!？」

ザキは大げさに驚いた。気づいてたのあたしの方だけって、何か不満なんですけど。

「あのコンビニを一ブロック先に行くとお寺あるでしょ？　あたしの家お寺の横の坂上ってすぐのところにある二階建てのアパートだもん」

「本当かよ。俺の家その道の一本向こうだわ」

「やっぱりね」

そうだと思った。直線距離だと百メートルも離れてない。何か見たことある人だなと思って、それでコンビニでもついしげしげと見つめてしまったんだけど。

「あそこに家族三人で住んでんの？」

「あそこは仮住まい。市内の別のところに家建ててる途中で、それでちょっと前に引っ越してきたんだけど」

「うっそ、全然知らなかったわ」

「あたし、ザキのこと何度か見かけてたよ」

「マジ？」

「こんな可愛い子とすれ違ってながら気づかないなんて、ザキも見る目ないなあ」

「ホントだな」

あたしはいつものように冗談半分で言っただつたのに、ザキに全肯定されてちよつと戸惑った。何か面映くなつて照れ隠しに話してる間に飲み終わったはずの缶コーヒーを呷る。顔が赤くなりそうで、砂浜の上を吹き渡っていく風がにわかには心地よく感じた。

お礼に帰りは自転車漕いであげてもいいかな。スクールバックの中にジャージ入ってたはずだし。今日は本当は平日で、あたしの学年はまだ授業があるんだけど、どうせ大した授業じゃないしサボつたつて何ともない。

一日は始まつたばかりだし、自転車を引いて歩いて帰つてもいいかもしれない。二人でゆっくり話しながら。

あたしは勢いよく立ち上がると海岸の砂を蹴飛ばしながら波打ち際まで歩いていった。その背中にザキが呼びかけてくる。

「なあ、一つ頼みがあるんだけど」

「何？」

振り向いた途端それまでスカートの裾を揺らす程度だった風が急に強く吹いてあたしの髪や制服やマフラーを好き勝手にはためかせていく。砂粒が顔にあたつて少し痛い。

「今日さあ、向こう戻つたら一緒に行つてほしいんだ」

風がやむとザキの声が聞こえてきた。その内容で、あたしはすぐにピンとくる。

「コンビニ？」

一度だけザキはうなずいた。

「やつぱ、謝つとこうと思つて」

いい心がけた。あたしは寛大な微笑みを浮かべてうなずくと申し出を了承した。男の子に頼られるのって何か楽しいかも。あのコンビニの店長さんも若いけどいい人そうだったし、正直に話せばきつと許してくれると思うけど。

その時、その日の始まりを告げる陽光の第一矢が街の建物の間を縫い、砂浜の上に細く鋭く差し込んだ。低高度の太陽の光は茶色い

砂の上に長く濃い影を落とす。

「あとさあ」

ザキはさらに続けた。あたしが振り向いて朝日の眩しさに目を眇めながら次の言葉を待っている、ザキは一瞬だけためらって、それから真剣な表情で問いかけた。

「ついでに、俺たち付き合わねえ？」

口調は軽い。でも、気持ちはきつと軽くない。

彼氏にふられた次の日に別の人から付き合ってくれて言われるとは思わなかったな。捨てる神あれば拾う神ありってヤツ？

あたしの答えはとくに決まっていたのだけど。少しいじわるしなくて考えるフリをしながらあたしは横風を受けて冷たい海の中に二、三步足を踏み入れた。背中にザキの視線が注がれているのが分かる。

その日も風が強かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6203h/>

静かな夜

2010年10月8日14時22分発行